

頭蓋の顔面部形態からみた古墳時代の地域社会：九州を対象として

田淵, 朱莉
九州大学地球社会統合科学府：修士課程

<https://doi.org/10.15017/7171721>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 21, pp.85-112, 2024-03-31. The Kyushu University Museum

バージョン：

権利関係：



頭蓋の顔面部形態からみた古墳時代の地域社会

——九州を対象として——

田渕 朱莉

九州大学地球社会統合科学府修士課程：〒819-0395 福岡市西区元岡744
tabuchiakari@outlook.jp

要旨：本稿では、九州出土の古墳時代人骨を対象に、頭蓋骨の顔面部形態とその出現背景について検討を行う。古墳時代人骨にみられる大陸的な要素の地理的な分布に関しては、形質人類学的な分析によって地域性が明らかにされつつある。また、古墳時代は特に朝鮮半島と活発な交流が行われたことが考古学によって示されており、それに伴う人々の移動が人骨の形質にみられる地域性の発現に寄与したと考えることができる。しかしこれら形質人類学と考古学の成果を統合した研究は少なく、古墳時代の広域的な交流を考慮するのであれば、人々の移動を伴う交流が行われた可能性のある地域全体から出土した資料を収集・整理し、分析を行っていく必要があると考える。本稿では、弥生時代以来大陸との交流の窓口である九州を対象に、古墳時代人骨の顔面部形態の分析と、各個体に付随する副葬品や埋葬形式といった考古学的情報を統合して検討することによって、古墳時代における日本列島内外の交流について明らかにすることを目的とする。また、顔面部形態について地域ごとの平均値による比較といった、従来形質人類学でとられてきた方法ではなく、各個体の計測値そのものを分析に用いることで、被葬者像の復元と歴史の中におけるその位置づけを試みた。結果として、概ね先行研究を追認する結果となったが、個体ごとに分析することによって、特に南九州においてこれまで指摘されてきた地域性とは異なった特徴を持つ個体や集団が抽出されたことから、九州内部の人の移動がその形質発現に寄与したのではないかと考える。

キーワード：九州、古墳時代人骨、顔面部形態、主成分分析、交流

1. はじめに

本研究で扱う古墳時代は、日本列島各地に営まれた古墳によって代表される時代であり、その形態・規格から、古墳築造にあたってヤマト政権を中心とする秩序が存在していたことを示すと考えられている（小野山 1970）。したがって古墳時代は、弥生時代以来の一般成員間の交流や、小地域内の首長間のつながりに加えて、各地域とヤマト政権との相互の関係性が構築された時代であるといえる。また、特に中期以降には朝鮮半島との交流によって新たな技術や文化が列島にもたらされる。これまで考古学的研究によって弥生時代から古墳時代までにいくつかの渡来の画期が設定されているが（小田 1987；熊谷 2001；北條 2012）、古墳時代においては、特に5世紀を中心に伝えられた各種の技術・文物が様々な形で古墳時

代の社会の発展に大きく寄与したことが指摘されている。当時の対外交流の結果として、これまで考古学では大陸由来の遺物、とりわけ朝鮮半島系の遺物について研究が行われてきている。亀田修一氏は、「朝鮮半島においては比較的にみられる資料で、逆にそれまでの日本においては基本的に存在しなかった、または使用されていなかったもの、日本に類似するものはあるものはあったが、技術的な面や形態などにおいて大きな差があったもの」（亀田 2005）として朝鮮系考古資料を定義し、列島における渡来人の痕跡を探す際の指標としている。具体的な例として、遺構では初期のカマドやオンドル住居、大壁住居、初期の横穴式石室、馬埋葬土坑などが、遺物としては初期の須恵器、軟質・陶質土器、初期鍛冶具、鉄鋌、金属製の装身具などが、また考古資料から復元される儀礼としては初期の土器副葬や煮炊き具の副葬などがあげられ

ている（亀田 2020）。5世紀を中心として列島に流入したこれらの文物・技術が、住居などの生活レベルから乗馬習慣の普及による軍事面の戦闘スタイルの変化、新たな金属加工技術を用いた鉄製品の国内生産と、ヤマト政権によるそれら鉄製品の各首長への分配、横穴式石室の採用による葬送観念の変化など、様々なレベルにおいて当時の日本列島の社会に変化をもたらしたと考えられる（北條 2012；和田 2015）。辻田淳一郎氏は古墳時代について、列島内各地の有力者が古墳というモニュメントを共有しつつ、競合関係にあったとする（辻田 2012）。そのような状況下で、各地の有力者層にとっては新たな技術・文物を取り入れることは重要な課題であり、またヤマト政権においても地域支配を遂行する中でこのような渡来系文物・技術を有効に活用していったと考えられる。したがって、古墳時代は渡来人および彼らが持つ技術や文化をめぐる、朝鮮半島と列島の各地域間、また列島内の各地域間で交流が盛んに行われていた時代であり、その点で弥生時代とは異なる背景のもとに人々が移動したと考えられる。また列島内の各地域がそれらを受容する過程には、各地域独自の自立的な交流によって獲得した場合、ヤマト政権のもとに集積され、首長層に分配された場合、各地域の首長がヤマト政権の対外交渉に参与する形で実際の交渉を請け負っていた場合などが考えられ、時期や地域によって違った様相をみせつつ、さまざまな交流のあり方が併存していたのではないかと考えられる（高田 2014）。したがって、古墳時代における朝鮮半島系の情報や文物の移動の背後には、受容地域と朝鮮半島との直接的な関係性に加え、ヤマト政権との関わりも考慮する必要がある。

古墳時代の人々の交流に関しては、形質人類学による研究も行われている。基本的には弥生時代に獲得した高顔・高身長の特徴がその後どのように日本列島に拡散していくかについて、古人骨の形態に示される地域性から検討するもので、金関丈夫氏の渡來說がベースとなっている。金関氏は地域ごとの渡来の頻度の違いが地域差を生じさせる要因と考えており（金関 1976）、その後の研究も渡来的形質をもった人々との混血による遺伝的影響の濃淡が地域差を発現させているという認識のもとに、詳細な地域差が検討されている。

本研究で対象とする九州の古墳時代人骨の形質およびその地域差については、永井昌文氏による研究がある。

永井氏は九州及び山口・鳥取県出土の古墳時代人骨の特に頭蓋骨について、時期的な差よりも地域的な差が優先することを指摘する。つまり、南九州や九州山間部では身長・顔高が低い人々がまとまるのに対し、北九州では身長・顔高・眼窩高ともにバラエティに富んだ様相を示すとする。またこのような南北の差を「弥生時代から古墳時代まで引き続いた特徴」としている（永井 1981）。また、同地域出土人骨を出土地点から旧国単位に分け、それぞれの計測値を地域間で比較したところ、高顔・高身長の「渡来型」は北豊前・筑前地域に、低顔・低身長の「在来型」は豊後地域にそれぞれ分布が集中する様相が示されることを指摘した。またその他の地域には両者の混在型、あるいは中間的な特徴を持つ人骨が出土することから、所謂「渡来型」が北豊前・筑前地域を「同心円の中心とするかのように」分布し、周辺に向かって「在来型」の傾向が強まるという地理的勾配も指摘している（永井 1985）。また、土肥直美氏・田中良之氏の研究では西日本を対象に頭蓋形質の地域差が体系的に検討されている。両氏は現在の博多駅を起点として、距離と主成分分析の結果を照らし合わせることで渡来的形質の拡散様相を検討し、農耕に適さない島嶼部や海岸部・山間部に対し、平野部では形質の変化が緩やかであることから、筑前地域を起点とした地理的勾配の存在を示した（Doi and Tanaka 1987）。

南九州についてはまず内藤芳篤氏の研究がある。内藤氏は南九州古墳時代人骨の各計測値から、同地域では短頭が比較的多く、低顔・低眼窩・低鼻、顔面部の凹凸が比較的強いなどの特徴を地域的特徴と捉えている。また同地域内での各時代人の比較から、縄文時代から現代まで時間的変化が追えることや、九州縄文時代人・西北九州弥生人・関東古墳時代人に近似すること、対して沖縄・華南・アジア東南部の新石器時代人骨とは先の集団ほど類似しないことから、南九州古墳時代人を、同地域の縄文時代人が外来の集団による遺伝的影響を受けることなく古墳時代まで移行した集団とした（内藤 1985）。このような「南九州古墳時代人＝低顔・低身長・短頭」という従来の理解に対し、松下孝幸氏は南九州をさらに小地域に分けて分析を行った結果、当地域の古墳時代人を以下の三つのタイプに分類した。すなわち、低身長で頭型は中頭、低・広顔傾向が著しく鼻根部が陥凹した「南九州山間部タイプ」、極めて短頭性が強く、高顔・高身長

を特徴とする「宮崎平野部Ⅰタイプ」、高顔・高身長ではあるが、頭型が中頭かつ低頭、眼窩や鼻部の高径が低い「宮崎平野部Ⅱタイプ」である（松下 1990）。

以上示された地域差より、弥生時代に続く古墳時代においても、人骨の形質に表れる地域差は混血による遺伝的影響の濃淡が地形に反映された結果であり、弥生時代以来の大陸との交流の窓口である北部九州を中心に、そこから距離が離れるごとに渡来的形質の影響が弱まると考えられてきた。松下氏によって示された南九州における高顔・高身長の人々の存在の指摘は重要ではあるが、それが平野部出土人骨である点では、従来の地理的状況に応じた人々の拡散によって説明は可能である。一方、山口敏氏は東日本の古墳時代人骨について分析を行い、当該地域の古墳時代人骨が、偏差折線による比較では西日本古墳人よりは縄文時代人に近く、また縄文時代人と現代人のほぼ中間に位置する点で森沢（1976）や清野（1938）の結果を追認しているものの、頭蓋小変異や顔面頭蓋の平坦度では中国新石器時代人や朝鮮現代人に近い値が示されることを明らかにしている（山口 1985, 1988）。これらの成果を踏まえつつ池田次郎氏は古墳時代人骨について、古墳時代にも混血による渡来的形質の拡散が引き続き行われ、それがヤマト政権の支配拡大に伴っていた可能性があることを指摘している（池田 1993）。

2000年代に入り、これまで縄文時代人的な形質を長く保持していたと考えられていた、南九州の山間部に位置する島内地下式横穴墓群より、北部九州の集団に匹敵する高顔の人骨が多数出土した。宮崎県山間部のえびの市に所在する島内地下式横穴墓群では、数多くの地下式横穴墓が発掘され、豊富な副葬品とともに多量の人骨が良好な状態で出土している。出土人骨の報告を行った竹中正巳氏は、南九州山間部の古墳人の特徴を「サイズの比較的大きな脳頭蓋、頭蓋長幅示数の中頭型、広鼻、前頭部の突出、鼻骨の彎曲、大腿骨の柱状性」（竹中 2010）であるとしつつも、当遺跡出土人骨の中には上顔高・眼窩高の高い個体の存在も確認されることを指摘した。また男性の頭蓋骨について9項目の計測値からペンローズの形態距離を求め、それを基に行ったクラスター分析では、島内地下式横穴墓を造営した集団は宮崎平野部古墳人や山陽古墳人、北部九州弥生人と同じグループとなること、頭蓋形態小変異22項目の出現頻度に基づくスミス

の距離でも本州中央部・東部古墳人、北部九州弥生人などと近くなるという結果を示している（竹中他 2001；竹中 2010）。またえびの盆地の特殊性については高椋浩史氏による研究からも指摘されている。高椋氏はまず四肢骨形態の比較から、南九州集団においても断面形態において北部九州弥生時代集団に類似性が確認されることを指摘している（高椋 2021）。さらに九州出土古墳時代人骨の顔面部形態について分析を行ったところ、基本的に永井（1985）や Doi and Tanaka（1987）で確認された地域差を追認しつつも、同じ宮崎県山間部でもえびの盆地の集団は高顔・高眼窩・狭鼻という点で西諸島地域の集団とは異なることを示している（高椋 2022；高椋 米元 2022）。

以上の一連の研究をまとめると、弥生時代に大陸から日本列島に渡った渡来人との混血によって生じた高顔・高身長という新たな形質を持つ人々は、その後渡来と混血が繰り返されていく中で列島内に拡散し、その遺伝的影響の濃淡によって地域差が生じているとの解釈がなされている。しかし各地の遺跡の報告書等によって古人骨資料のデータが蓄積されている現在、南九州や山間部においても高顔・高身長の人々がある程度存在していたことも明らかにされ、これらの出現背景については新たな説明が求められている。例えば、上述の古墳時代における列島内部および日本列島各地と朝鮮半島諸勢力との多様な交流の様相を考慮すれば、古墳時代にも弥生時代とは異なる形で渡来人との混血が行われた可能性や、既に渡来的形質を獲得していた集団の更なる拡散が行われた可能性も考えられる。

以上、考古学と形質人類学による古墳時代の研究を概観した。考古学では、朝鮮系考古資料をもとに列島内外の活発な交流の様相が明らかにされつつある。形質人類学では、詳細な地域性が明らかにされ、古墳時代にも引き続き渡来人との混血が行われた可能性が示唆されている。しかし、現状ではこれらの成果が体系的に検討されているとは言い難く、古墳時代における人々の交流に関する更なる研究の進展には、考古学と形質人類学、両分野の統合が必要であろう。

ここで、本稿の目的は古墳時代人の頭蓋骨顔面部形態の特徴とその分布から、古墳時代における列島内外の交流の諸相について九州を対象に検討を行うものである。九州を対象とする理由は、朝鮮半島との近さにある。後

ほど詳しく述べるが、特に北部においては活発な交流が行われていたことから、その影響を受けやすい地域であったといえる。一方で当時の政治・物流の中心であった近畿地域を拠点とするヤマト政権にとっては、朝鮮半島への航路上にある地域であり、その地理的重要性から、ヤマト政権と九州各地の首長の間には政治的な意図を持った交流が考えられるからである。

実際の分析では頭蓋骨の顔面部形態の比較を行っている。これまで自然人類学分野では集団の動態に注目が集まっていたために、個人の形質について言及されることは少なかった。本研究では集団の平均値を地域ごとに比較するという、これまでの形質人類学の研究で一般的であった方法ではなく、各個体のデータをそのまま使用することで、特徴的な集団・個人の抽出を試みたい。もちろん顔面部形態のみでは、当時の渡来人やその子孫との婚姻を伴った交流の実態と背景について明らかにすることは困難である。しかし考古資料の動態も併せて検討することで、渡来的形質がその地域においてどのような階層の人々にみられるのか、またその形質を獲得した背景にどのような人々の交流があったのか、考察を試みる。このような考古資料と人骨の形態を併せて検討していくことが、古墳時代における交流の実態を明らかにする上で重要な視点になるのではないかと考える。

2. 資料と方法

(1) 分析対象遺跡・資料

本研究では、弥生時代以来大陸との交流が活発であり、かつ、これまでの研究の通り人骨の形態において地域性に富んだ九州を対象地域とする。

分析に用いた資料は全部で男性157体、女性110体である。これらの人骨が出土した遺跡（対象遺跡）は全91遺跡（表1、図1）であり、分析にあたっては九州を以下の11の地域に細分した。

1. 福岡平野・三国地域
2. 宗像・遠賀川流域
3. 周防灘沿岸北部
4. 周防灘沿岸南部
5. 筑紫平野
6. 佐賀平野以西
7. 大分県山間部
8. 有明海沿岸南部周辺
9. 宮崎平野
10. 小林・都城盆地
11. えびの盆地¹

以下、各地域について、考古学的成果をもとに各地の様相を対外・対内交流の視点から整理する。

1) 福岡平野・三国地域

弥生時代以来朝鮮半島との交流が活発な地域である。特に注目されるのは弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて福岡平野の沿岸部で成立した「博多湾貿易」と、前期前半に至りその中心として成長・発展する西新町遺跡の存在であろう（久住 2007）。西新町遺跡では西日本各地の土師器とともにカマド付き住居、オンドル住居、半島各地の土器が出土（福岡市 1994）しているが、カマド付き住居は当時の日本列島ではまだ一般的ではなく、普及するのは凡そ5世紀前半以降である（合田 1995；亀田 2005）。古墳時代中期には博多湾貿易は衰退するが、朝鮮半島との交流が断たれたのではなく、むしろ積極的な交流の結果を示す遺跡・遺構が多数検出されている。有田・小田部遺跡、吉武高木遺跡、梅林遺跡ではオンドル状遺構が検出される他、半島系土器が出土している（福岡市 2000・2003；亀田 2018）。また梅林古墳、カクチガ浦遺跡、クエゾノ遺跡、金武古墳群で初期の土器副葬や鉄滓の供献がみられるが、古墳内の土器副葬も当時としては珍しく、半島との関わりが示唆されている（重藤他 2005；重藤 2011）。

今回対象としたクエゾノ遺跡では付近に馬埋葬土坑を検出した吉武遺跡群、初期カマドを検出した清末遺跡が分布し、クエゾノ2号墳からは朝鮮半島南部製の可能性がある陶質土器が、5号墳からは鍛冶道具が出土することから、渡来人の古墳群、または製鉄などに従事した渡来的集団を統率した首長の墓群と考えられている（福岡市 1995；重藤他 2005）。分析を行った女性人骨が埋葬されていた1号墳は、同遺跡中では最も早く築造された前方後円墳であり、他の古墳とも8mの比高差が存在する（福岡市 1995）。当被葬者には鍛冶具の副葬はみられないことから、鍛冶に従事した工人そのものとするのは難しいが、そのような集団と何らかの関わりを有していた人物であったことが想定される。

同じく分析対象である老司古墳は5世紀初頭前後に比定される前方後円墳であり、最古段階の竪穴系横口式石室が採用される古墳として知られる。副葬品としては三角縁神獣鏡を含む鏡や勾玉、管玉など装身具、鉄製武器や短甲が出土している（福岡県 1989）。卯内尺4号墳は5世紀初頭～中頃の築造と考えられる円墳で、クエゾノ1号墳・老司古墳と時期的に近接する。A号男性に竪櫛が副葬されていた他は、棺外から鉄製農工具が出土して

おり、墳丘規模からみても当時の福岡平野における中小首長と考えられる（福岡市 2012）。

以上 3 遺跡は時期的にも地理的にも近接し、墳丘規模・形態、副葬品から、老司古墳を頂点としてその下にクエゾノ 1 号墳、卯内尺 4 号墳が続くような階層が考えられる。

2) 宗像・遠賀川流域

沿岸部にあたる宗像地域も、福岡平野と同様古墳時代に朝鮮半島と活発な交流を行っていたとされる地域である。

3 世紀後半から 4 世紀前半に比定される久原瀧ヶ下遺跡からは板状鉄斧や初期カマド、陶質土器などが出土し、朝鮮半島との日常的な交流が考えられる（亀田 2013）。古墳時代中期には大首長墓が内陸部から海岸部の津屋崎地域に移り、海岸部を中心とした大型古墳群の展開と渡来系文化受容の動向が一致（重藤 2011）することが注目されるほか、奴山伏原遺跡や生家釘ヶ裏遺跡などでオンドル住居や移動式カマドが出土している（津屋崎町 1996；亀田 2013）。また津屋崎古墳群で大型古墳が築造される。今回対象とした宮司井手ノ上古墳は、津屋崎古墳群が築造される前の段階の古墳として、当地域の在地首長が葬られたと考えられている（津屋崎町 1991）。副葬品としては鉄製武器類や U 字形鋤先などの農具、三角板革綴短甲が確認されている。また、この時期には沖ノ島祭祀も盛行することから、祭祀を行う中心的な集団として、ヤマト政権とつながりを有していたことも考えられる。

福岡内陸部では 5 世紀代のオンドル住居が、5 世紀中頃の釣川流域内陸部では光岡六助遺跡でオンドル住居、富地原川原田遺跡では初期カマドとともに軟質土器・平底の土器がまとまって出土していることから、渡来人一世あるいは二世の住居として注目される（重藤 2011；亀田 2013）。また夜白・三代地域では、中期前半の土師器とともに軟質土器・鳥足文風の土器がまとまって出土する。その他勝浦峯ノ畑古墳で百濟製と思われる金銅製冠帽・馬具の出土が確認され、番塚古墳では鳥足文土器の副葬、釘・鋸で結合した棺、蟾蜍形装飾が出土し、被葬者は対朝鮮半島交渉において重要な役割を持っていた人物と考えられている（重藤 2011）。後期に至り、津屋崎地域ではオンドル状遺構を検出した在自下ノ原遺跡に代

表される在自遺跡で有溝把手付甑、鳥足文タタキ土器などが出土し、特に在自下ノ原遺跡では古墳時代を通じて朝鮮半島系土器が出土することから、この地域が古墳時代の海上交通における拠点の一つとして、朝鮮半島と継続的な交流を行っていた可能性が指摘されている（亀田 2013）。

今回対象とした遺跡としては、手光古墳群の南支群 2 号墓より多角形袋部鉄矛、蛇行鉄器などが出土していることが注目される。蛇行鉄器は馬具の一種と考えられ、日本列島での出土は珍しく、一方朝鮮半島では南部に 10 例確認されている（横田 兎玉 伊崎 1981）。今回分析を行ったのは北支群 3 号墳であり、南支群 2 号墳とは約 1 世紀の隔たりがあることから、直接の関係性は考え難い。

遠賀川上流域は古墳時代中期より壱山古墳や小正西古墳被葬者などの中小首長層を中心に朝鮮半島との交渉が行われていたとされる地域である（嶋田 1991；高田 2014；辻田 2015）。特に壱山古墳被葬者については朝鮮半島からの「亡命者」や「集団移住者」との見解もある（嶋田 1991）。また香春町には『豊前国風土記』に「新羅国神」が自らの意思で渡来したとの記載があり（中野 幡 2001）、古墳時代後期頃には遠賀川上流域が相対的に新羅と強い関係性を有していたことが考えられる。

今回対象とした遺跡としては、長畑遺跡から金製の垂飾付耳飾が出土していることが注目され、洛東江以東地域を中心に分布する型式であるとの指摘がある（香春町 1998；高田 2014）。

3・4) 周防灘沿岸北部・南部

朝鮮半島との繋がりに加えて、古墳時代においてはヤマト政権との強いつながりが示唆される地域である。

北部にあたる京都平野では石塚山古墳や稲童（石並）15号墳のように、前期から中期に甲冑が集中的に副葬される点が注目される（橋本 2002；西嶋 2014；山中 2005）。特に三角縁神獸鏡などの副葬がみられる石塚山古墳は、同じく周防灘沿岸の中津平野に築造された赤塚古墳とともに九州最古式の前方後円墳としてヤマト政権との関係性が示唆される（小田 1970）。このような周防灘沿岸部の特殊性は、ヤマト政権が近畿地域から瀬戸内海、周防灘を抜けて朝鮮半島へと至る海上航路上に位置することや、さらにそこから南下して南九州へと至る九州東岸ルートの起点となることに起因すると考えられる。

今回稲童古墳群15号墳を対象としているが、上述の通り方形板葺短甲が出土し、以降同古墳群にて甲冑の副葬がみられる。しかし稲童古墳群において甲冑が副葬されるのは15号を含めて基本的に円墳であり、同じく甲冑を副葬する古墳としては石塚山古墳、御所山古墳、番塚古墳といった前方後円墳がより上位に位置付けられることから、山中英彦氏はこれらの前方後円墳被葬者の統括を受けながら、その組織化で成長した勢力と位置付けている(山中 2005)。

また、5世紀後半頃には福岡県行橋市の竹並遺跡や、大分県中津市の上ノ原横穴墓群で竪穴系横口式石室と形態的に類似する初期の横穴墓が確認され、この地をもって横穴墓が出現したと考えられている(赤崎 1979; 橋口 1993)。特に対象遺跡である上ノ原横穴墓群では、初期カマドを検出する佐知遺跡と時期的にも位置的にも非常に近接することが注目される(大分県 1982・1989)。初期カマドやオンドル状遺構は京都平野南部の築城五反田遺跡、京ヶ辻遺跡でも確認され(福岡県 2000)、特に後期には京都平野でオンドル状遺構をもつ住居が集中的に営まれるようになり、代表的な遺跡としては小石原泉遺跡で6世紀後半のオンドル住居が20棟以上検出され、「渡来人たちのムラ」と考えられている(亀田 2005)。このことは渡来人の永住を必ずしも示唆するものではないが、一時的にでも渡来人がこの地に居住した可能性は十分に考えられること、またそれを可能にするような渡来人との活発な交流があったことが考えられる。なお、上ノ原横穴墓群22号墓では銅釧や陶質土器蓋の副葬が確認され、中期後葉以来の継続的な渡来人との関係が示唆される(田中裕 2005)。

5) 筑紫平野

特に中期以降渡来系文化が色濃くみられる地域である。前期段階の古墳としては4世紀後半頃に比定される花簗2号墳で鉄鋌16本をはじめとした鉄製品の副葬が確認されており、朝鮮半島との関係性が示唆される(宮田 1996a)。また筑後川の下流に位置する諸富町の遺跡から、外来系土器が多量に発見されており、筑紫平野への古墳文化流入の拠点と目されている(片岡 1996)。中期に至り、老司古墳や谷口古墳など玄界灘沿岸の地域に出現した竪穴系横口式石室は筑後地域にも取り入れられ、朝倉地域の古寺墳墓群でみられる竪穴系横口式割貫石室はそ

の影響のもと構築されたと考えられる(橋口 1993)。また5世紀前半代にはこの地域で鍛冶生産や朝倉窯跡群での初期須恵器生産が開始されたと考えられている(宮田 2002; 重藤他 2005)。付近には早くから土器副葬や鍛冶具、馬具の副葬が行われている池の上・古寺墳墓群が確認され、このような須恵器生産に従事した渡来系工人の墳墓であるとの見解がある(宮田 2002; 亀田 2018)。そのほか、当地域は中期以降、鍛冶生産や土器生産、また牧の存在が示唆されることなどから、これら各種生産に渡来人が関与した可能性が示唆されている(桃崎 1993; 宮田 1996b, 2002)。

今回対象とした池の上・古寺墳墓群について、古寺D-10号墓女性に副葬されていたジョッキ形土器は把手に渦文を持つことから、朝鮮からの舶載品との見解が強い。しかし報告者によると、朝鮮半島の例は壺や脚付壺が多く、渦文も古寺D-10号墳出土品のように5重ではなく3重の場合が多く、舶載品とするには疑問点が残るとする(橋口 1982)。

6) 佐賀平野以西

唐津平野は弥生時代においていち早く稲作文化を受容した地域の一つである。古墳時代においては、今回対象としている谷口古墳のように、初期の前方後円墳がいち早く出現することも注目される。

谷口古墳は全長約77mの前方後円墳であり、当地域最古級(4世紀末～5世紀初頭)の前方後円墳とされる。また後円部の石室には竪穴系横口式石室が採用され、鏡や装身具を中心とした豊富な副葬品が出土している(亀井 1982)。佐賀平野では5世紀中頃の久保泉丸山3号墳において、阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺が採用され、佐賀平野の首長層として環有明・八代海の首長との繋がりが考えられる(佐賀県 1986)。

7) 大分県山間部

沿岸部では初期の前方後円墳が確認され、早くからヤマト政権とつながりを有していたと考えられる地域である。

弥生時代後半末の白杵市下藤遺跡では板状鉄斧が、古墳時代前期中葉に竹田市都野原田遺跡から瓦質土器が出土し、古墳時代開始期には既に内陸部でも朝鮮半島の遺物が流通していたことが示される。中期には筑後川上流

域に位置する日田市荻鶴遺跡より、鍛冶遺構と鉄鋌を供えた祭祀遺構が検出され、その立地から北部九州から移動してきた集団によるものと考えられる(田中裕 2005)。日田盆地の東には玖珠盆地が位置し、新たな文化の受容に際しては、この筑後川を介した筑後地域の集団との交流が関係する可能性がある。この頃普及し始めるカマドは宇佐市や豊後高田市、日田市、大分市など現在の福岡県と接する地域や平野部でまず出現し、周防灘沿岸部・筑後平野の集団との交流によって、新たな文化を取り入れた様子が想定されている(宇佐市 1987；大分県 1992；田中裕 2005)。

大分県南西部の竹田市周辺では、今回対象としている長湯横穴墓群および山脇横穴が中期末頃より造営される。報告書によると、長湯横穴墓群3号墓は特に規模が大きく計10体分の人骨とともに、馬具や装身具などの豊富な副葬品が出土している。また、6号墓は初期横穴墓の4号墓の次に造営されたと考えられ、その構造に初期横穴墓の特徴を残している(大分県 2004)。また6号墓は蛇行剣を副葬し、玄門右上に刀子を突き刺すなど、南九州の地下式横穴墓と共通点がみられる。

今回対象とした遺跡でも、立切地下式横穴墓群および東二原地下式横穴墓群で同様の行為が確認されている(小林市 1990；宮崎県西諸県郡高原町 1991)。7号墳からもヤコウ貝製垂飾やゴホウラ製貝輪が出土することから、長湯横穴墓群造墓集団が南九州との交流を行っていた可能性が考えられる。しかし、このゴホウラ製貝輪に関しては筑後平野を中心に分布が確認される繁根本型であり(木下 2004)、筑後川を介した筑後平野～日田・玖珠地域の交流を考えると、筑後平野経由でもたらされた可能性も考えられる。

8) 有明海沿岸南部周辺

宇土半島基部では4世紀代の古墳が複数確認され、周防灘沿岸部、玄界灘沿岸部と並んで九州における初期の古墳が展開した地域として注目される(小田 1970)。今回対象とした向野田古墳もそのうちの一つに位置付けられ、主体部からは阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺に単独で埋葬された女性人骨と、棺内に内行花文鏡など鏡3面、多数の玉類、棺外に多量の鉄製武器が副葬されていた(熊本県宇土市 1978)。

9) 宮崎平野

考古学的には弥生時代後期には宮崎県平野部および大淀川流域で板状鉄斧や瀬戸内海系、畿内系土器が出土することが確認され(東 2005)、当時すでに広範囲の交流を行っていたことが考えられる。古墳時代前期には宮崎平野の生目古墳群、檜古墳群、肝属平野の塚崎古墳群が形成され、周防灘沿岸を介した九州東岸ルート上に古墳文化が展開していることが確認できる(橋本 2010)。一方南九州西岸部では、地下式板石積石室が分布するが、長崎県五島列島の弥生時代中期に非常に類似した埋葬施設が確認されることから、有明海・八代海を通じて波及したものと考えられている(河口 1987)。九州を北から南へと進むルートだけではなく、貝製品に関しては南から北へ、九州の東岸・西岸を通る「東の貝の道」・「西の貝の道」の存在も指摘されている(木下 1996)。特に東岸を通るルートは古墳時代における南島製貝製品の主要ルートと考えられる(橋本 2012)ことから、九州東岸では南北双方向のルートのもとに人やモノの動きが活発に行われていたものと考えられる。

中期においても宮崎平野から肝属平野にかけて前方後円墳が築造されることや、鉄鋌、初期U字形鍬鋤先、鐮子、柄付手斧などの朝鮮半島系鉄製品が主に東岸部で出土することから、前期に引き続き九州東岸部のネットワークが活性化されていたことが指摘されている(橋本 2012)。またこの頃から造営されるようになる地下式横穴墓は「東九州ルートで5世紀中葉頃に出現した初期横穴を介して」(橋口 1993)成立したと考えられ、今回対象とした地域では宮崎平野～えびの盆地まで広く分布する。以上のことから古墳時代において九州東岸ルートを通じて宮崎平野、さらにそこから内陸部へと通じるルート上の人々の交流が考えられる。

10) 小林・都城盆地

宮崎平野からえびの盆地へと向かうルート上に位置する地域である。山間部に位置するものの、えびの盆地の島内地下式横穴墓群のように、内陸部の地下式横穴墓においても短甲や馬具、蛇行剣や銀象嵌大刀が分布することから、東岸のネットワークを介したヤマト政権と宮崎県山間部地域とのつながりが示唆される(池畑 2012；橋本 2012)。貝釧の分布も宮崎平野から内陸部の都城盆地、えびの盆地へと分布が集中し、宮崎平野から当地域を経

てえびの盆地へとこれら製品が流通した可能性が考えられる。

なお、今回対象とした遺跡は全て地下式横穴墓である。

11) えびの盆地

小林・都城盆地の項で述べた通り、九州東岸ルートを介した交流が行われていたことが想定される。当地域も対象遺跡は全て地下式横穴墓群である。

広畑地下式横穴墓群は調査者によって閉塞方法による分類が行われており（A類：竪坑上部閉塞，B類：羨道閉塞），両タイプは墓域を共有せずほぼ並行して営まれることから，集団の違いが示唆される他，A類と比較してB類は刀剣類の副葬率が低いが，B類で最も早く築造された06号は大刀を副葬，男性の単数埋葬であることなどの特徴が示されている（中野和 1991）。

島内地下式横穴墓群では副葬品で短甲や蛇行剣が多量に出土した点が特徴的であり，ヤマト政権との関連性が示唆される所以となっている。またそのような武器・武器の副葬が女性にも確認されている（宮崎県えびの市 2001等）。

(2) 分析方法

人骨の顔面部形態について，高顔の所謂渡来的形質がどのように出現するのか，形態分析を行い確認する。具体的には，顔面部の計測項目6項目（中顔幅，上顔高，眼窩高，眼窩幅，鼻幅，鼻高）について主成分分析を行い，全体の傾向を把握する。分析にあたってはIBM社製のSPSS Statistics Base 26.0とMicrosoft社製のExcel2022を用いた。

なお，分析に用いた計測値のデータは，現在九州大学総合研究博物館，および九州大学比較社会文化研究院基層構造講座古人骨・考古資料収蔵室に収蔵されているものに関しては筆者が計測を行い，その他は報告書等で得られたデータを使用している。計測はMartin-Saller (1957) および馬場 (1991) に従った。人骨の年齢推定は栃原の歯牙の咬耗度（栃原 1957），頭蓋骨の縫合（Buikstra and Ubelaker, 1994），恥骨結合面はBrooks and Suchy (1990)・Sakaue (2006)，耳状面はLovejoy (1985) を用いた。性別判定についてはBuikstra and Ubelaker (1994) を基準に，頭蓋骨の眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起で判定を行った。また，比較集団として筑前・筑後・肥前・豊

前・豊後古墳時代人（九州大学医学部解剖学第二講座 1988），南九州古墳時代人（内藤 1985），畿内古墳時代人（池田 1993），津雲縄文時代人（清野 宮本 1926），三津弥生時代人（牛島 1954），西北九州弥生時代人（内藤 1971），土井ヶ浜弥生時代人（金関 永井 佐野 1960），朝鮮半島から，金海礼安里遺跡出土人骨（金 白他 1985）を用いた。

3. 分析結果

主成分負荷量および固有値，累積寄与率

主成分分析の結果を示したものが表2から表5である。男性の第1主成分はすべての項目でプラスの値を示すことから，第1主成分得点が高いほど上顔のサイズが大きいことを示す。第2主成分では，中顔幅・眼窩高・鼻幅でプラスを，上顔高・眼窩幅・鼻高でマイナスの値を示すことから，第2主成分得点が高いほど眼窩以外の部位において低顔性が強く，低いほど高顔性が強いことが示される。固有値はそれぞれ2.206と0.938であり，第2主成分までの累積寄与率は52.406%である。

女性の第1主成分もすべての項目でプラスの値を示すことから，第1主成分得点が高いほど上顔のサイズが大きいことを示す。第2主成分は上顔高・眼窩幅・鼻高でプラス，中顔幅・眼窩高・鼻幅でマイナスを示すことから，第2主成分得点が高いほど眼窩以外の部位において高顔性を示し，低いほど低顔性を示す。固有値はそれぞれ2.041，1.173であり，第2主成分までの累積寄与率は53.555%である。

男女それぞれの主成分得点について，第1主成分得点を横軸，第2主成分得点を縦軸にとり，二次元展開したものが図2から図7ある。男性では横軸で右に行くほど上顔のサイズが大きいことを示し，縦軸では下に行くほど上顔高と鼻高が大きいことを示す。女性では，横軸で右に行くほど上顔のサイズが大きくなり，縦軸で上に行くほど上顔高と鼻高が大きい。なお，図中の○のドットは各個体の値を，×のドットは比較集団の値を示す。また，図2と図4から比較集団のみを抽出したものが図3，5である。今回分析を行った古墳時代人骨のみ抽出し，男女別に地域ごとに分けたものが図6，7である。

続いて，二次元展開図をもとに各地域内の様相につい



図1 遺跡分布図（地理院地図をもとに筆者作成）

地域区分：1. 福岡平野・三国地域 2. 宗像・遠賀川流域 3. 周防灘沿岸北部 4. 周防灘沿岸南部
5. 筑紫平野 6. 佐賀平野以西 7. 大分県山間部 8. 有明海沿岸南部周辺 9. 宮崎平野
10. 小林・都城盆地 11. えびの盆地

表1 対象遺跡

地域区分	No.	遺跡名							
1	1	井山古墳	23	前田山遺跡	46	稲佐神社グラウンド遺跡XIII号	8	69	四十八塚5号墳
	2	クエノノ1号墳	24	石並15号墳	47	谷口古墳		70	千崎古墳
	3	和田B遺跡3号墳	25	竹並遺跡	48	双水サコ5号墳		71	桐ノ木尾ばね古墳
	4	老司古墳	26	屋敷田山横穴	49	双水柴山1号墳		72	西都原16号6支線道路横穴
	5	卯内尺4号墳	27	古川平原5号墳	50	古田遺跡		73	常心原5号地下式横穴
	6	宮ノ本6号墳	28	上柴山古墳	51	中江1号石棺		74	元地原地下式横穴墓
	7	唐人塚2号墳1号石棺	29	上ノ原横穴墓群	52	草場第2遺跡	9	75	市の瀬地下式横穴
2	8	宮司井手ノ上2号主体	30	別府折戸ノ上1号墳	53	吹上1号石棺		76	飯盛地下式横穴
	9	手光古墳群北支群3号墳	31	乃木松5号墳	54	元宮遺跡		77	上の原地下式横穴墓群
	10	南ノ前横穴墓群	32	池の上5号墳	55	後ノ迫石棺		78	東二原地下式横穴墓群
	11	新延野田A4号横穴	33	古寺墳墓群10号土壇墓	56	宇土3号墳		79	旭台地下式横穴墓群
	12	長畑2号石棺墓	34	柿原古墳群	57	志津里遺跡		80	大萩地下式横穴墓群
	13	蛸ヶ丘横穴	35	妙見古墳群	58	志津里横穴		81	日守地下式横穴墓群
	14	経塚古墳	36	外之隈Ⅱ区1号墳1号墓	59	寺山石棺	10	82	立切地下式横穴墓群
	15	稲築1号横穴	37	祇園山2号墳	60	陣ヶ台遺跡		83	塚原地下式横穴墓群
	16	反崎石棺	38	名木野古墳群	61	山脇横穴		84	原村上地下式横穴墓群
	17	裏の谷1号石棺	39	今福横穴	62	長湯横穴墓群		85	築池地下式横穴墓群
3	18	こうの巣横穴墓	40	平塚古墳	63	十六山横穴		86	菓子野地下式横穴墓群
	19	郷屋遺跡	41	平田原1号墳	64	下山古墳		87	町田堀遺跡
	20	岩屋石棺	42	久保泉丸山3号墳	65	樺野古墳		88	広畑地下式横穴墓群
	21	ピワノクマ2号石棺	43	小隈古墳	66	津袋大塚東側1号石棺	11	89	灰塚地下式横穴墓群
	22	小口迫池上横穴墓	44	織島西分1号墳	67	西潤野2号墳		90	島内地下式横穴墓群
			45	妻山石棺	68	向野田古墳		91	馬場地下式横穴墓群

表2 主成分負荷量 (男性)

	主成分負荷量	
	第1主成分	第2主成分
中顔幅	0.754	0.653
上顔高	0.884	-0.422
眼窩高	0.292	0.253
眼窩幅	0.455	-0.298
鼻幅	0.091	0.209
鼻高	0.745	-0.370
固有値	2.206	0.938
累積寄与率(%)	36.768	52.406

表3 主成分負荷量 (女性)

	主成分負荷量	
	第1主成分	第2主成分
中顔幅	0.759	-0.647
上顔高	0.819	0.522
眼窩高	0.420	-0.161
眼窩幅	0.326	0.408
鼻幅	0.278	-0.285
鼻高	0.659	0.457
固有値	2.041	1.173
累積寄与率(%)	34.012	53.555

表4 主成分得点 (男性)

地域	No.	資料名	主成分得点		
			第1主成分	第2主成分	
1	1	井山1	2.08162	0.19915	
	2	和田B遺跡3-3	0.75360	-0.60707	
	3	老司古墳2-1	-1.19232	0.05138	
	4	老司古墳4-2	0.04929	1.48208	
	5	卯内尺4-A	0.50712	1.26835	
	6	卯内尺4-B	-0.38888	1.81300	
	2	7	井手ノ上2	1.26758	-1.31697
		8	手光北3-1	2.28805	-1.05716
		9	南ノ前18-5-A	-0.46175	-0.34401
		10	新延野田A4-2	2.38301	0.52262
		11	蛭ヶ丘	0.47020	0.34000
		12	経塚	1.06081	-0.01689
		13	稲築1-1	2.11662	0.84593
		14	裏の谷1	0.20194	0.40777
3	15	こうの巣1	0.23725	0.38961	
	16	こうの巣3	-0.86520	-0.70758	
	17	郷屋C-3	-0.45368	-1.64664	
	18	岩屋	1.16704	-1.49048	
	19	ピワノクマ2	2.86266	-1.53487	
	20	小口追池上1	-0.03689	-0.72408	
	21	小口追池上3	0.01208	-0.83073	
	22	前田山I-5	1.32068	0.19253	
	23	前田山S-4-1	0.30594	0.05683	
	24	前田山S-11	1.24360	0.24422	
	25	石並15	1.70103	-0.98226	
	26	竹並G-10-2-1	1.06134	1.25610	
	27	竹並G-95-5	-0.24035	0.82630	
	28	竹並H-41	0.74919	-0.19932	
	29	屋敷田山1	0.72002	0.10622	
	30	屋敷田山2	-1.12198	-2.30226	
	31	古川平原5	-1.76311	-1.56174	
	32	上柴山	1.13566	-0.36300	
	4	33	上ノ原飯28	1.13514	1.61689
		34	上ノ原飯30	0.48641	-1.33600
35		上ノ原飯31	0.35983	-0.74942	
36		別府折戸ノ上1号	1.20821	0.34907	
5	37	乃木松5-2	-0.19954	1.17371	
	38	池の上5	1.04984	0.02367	
	39	柿原	-0.74450	0.48001	
	40	妙見14	0.27097	0.02885	
	41	祇園山2-1	1.85886	1.61057	
	42	名木野9-1	0.95071	-1.69969	
	43	名木野10-3	1.42466	1.55793	
	44	名木野10-4	0.67532	0.51305	
	45	今福	-0.18738	-0.36761	
	46	平塚A	-0.86711	-1.20640	
6	47	丸山3-1	0.61258	-0.01199	
	48	小隈1	0.81408	1.01798	
	49	小隈2	0.82095	-0.14120	
	50	織島西分2-1	-0.58598	1.54997	
	51	稲佐13-a	0.01876	-0.24968	
	52	谷口	-0.01940	0.71416	
	53	双水サコ5	-0.79772	0.91076	
	54	双水柴山1-3	-0.46590	0.22550	
	55	古田	-0.54966	-0.14017	
	56	中江1	0.13149	0.42185	
7	57	草場第2 37-1	-0.37985	-1.07500	
	58	草場第2 192-3	1.02119	-0.89812	
	59	元宮	1.04777	0.27143	
	60	後ノ迫1	-0.04816	1.06631	
	61	後ノ迫2	-0.98178	-1.92467	
	62	後ノ迫3	-1.66644	1.14149	
	63	宇土3-1-1	-0.38018	1.89681	
	64	宇土3-2-1	-1.03758	0.21658	
	65	志津里B-1 1	-0.07023	-0.12138	
	66	志津里B-1 2-1	1.06263	1.10318	
	67	志津里B-3 2-1	-0.33146	0.07577	
	68	志津里B-3 3-2	1.14140	-0.67963	
	69	寺山1-2	0.00257	-0.30076	
	70	陣ヶ台4-A-1	-0.78180	0.48524	
	71	陣ヶ台4-B-1	0.59478	1.11368	
	72	陣ヶ台4-C-1	-0.55213	-1.07998	
	73	山脇1	0.66554	-0.51393	
	74	長湯2-1	-1.72092	0.02289	
	75	長湯2-2	-0.41063	-0.23483	
	76	長湯3-3	-0.58593	-0.91198	
	77	長湯3-4	-0.65654	-2.09059	
78	長湯3-6	0.26859	-0.62681		
79	長湯3-7	-1.23088	-0.43607		
80	長湯6-2	1.16930	2.48296		
81	長湯7-1	-0.31317	-1.20722		
82	長湯9	-0.94607	-0.62152		
83	十六山2	-0.31793	0.82683		
84	下山1	0.58648	0.14281		
85	榎野	-0.30487	-0.87885		
8	86	津袋1-1	-0.17551	0.95726	
	87	西潤野2	0.17247	0.45866	
	88	四十八塚2	-0.19756	0.01044	
	89	四十八6	-2.16227	0.21344	
9	90	千崎18	0.95959	0.47176	
	91	常心原5-2	0.40977	-0.39307	
	92	元地原1	-0.01443	0.00020	
	93	市の瀬9-1	-1.06993	-0.53950	
10	94	飯盛1	-0.57581	0.41769	
	95	飯盛2	-0.68186	-0.85821	
	96	東二原2-1	-0.80620	-0.03787	
	97	東二原6-3	-1.72351	-0.15135	
	98	東二原8-2	0.12248	-1.10869	
	99	東二原8-3	-1.20350	-0.66979	
	100	東二原11-1	-0.17427	0.13666	
	101	東二原11-4	-0.37025	-0.12164	
	102	旭台3-2	-1.33284	0.59217	
	103	旭台7-1	-1.95679	0.77178	
104	大萩F 5-1	-1.11686	-0.04046		
105	大萩F 7-2	-0.04324	1.72236		
106	大萩37-3	-0.71943	0.23546		
107	立切3-4	-1.14458	-0.41089		
108	立切4-2	0.61076	1.67070		
109	立切4-3	-1.93248	1.53109		
110	立切6-1	1.13112	0.47474		
111	立切23-1	-1.54769	0.55411		
112	立切30-1	-0.36250	0.05640		
113	立切30-2	-1.07415	1.59700		
114	立切30-5	0.14715	1.76502		
10	115	立切40-3	-1.60353	-0.48858	
	116	立切63-4	-1.18701	0.33373	
	117	立切68-4	0.25360	-0.69465	
	118	塚原44-1-1	0.41129	3.48947	
	119	原村上2-1	-0.61506	0.57839	
	120	原村上4-1	-2.13691	1.54771	
	121	原村上6-2	1.50337	0.67581	
	122	菓子野57-5-1	-1.09034	-0.32808	
	123	菓子野57-5-3	-0.40551	1.45218	
	124	菓子野59-1-1	-1.30274	-1.23019	
	125	菓子野2011-2A-1	-1.82273	-0.41814	
	126	菓子野2011-2A-3	0.44386	-0.14801	
	127	町田堀8	0.75307	-1.47389	
比較集団	128	広畑05-1	-0.24511	0.55592	
	129	広畑05-2	-0.78912	0.46245	
	130	広畑06	-0.53142	-1.75936	
	131	広畑10	-0.74953	2.02082	
	132	広畑11-2	0.80123	0.68967	
	133	広畑13-2	-0.73624	-0.10312	
	134	広畑16-2	-0.22281	1.86148	
	135	灰塚4	-1.53950	1.47309	
	136	灰塚23-1	0.90780	-1.12924	
	137	島内15-2	-0.59987	-0.10588	
	138	島内22-1	-1.17010	-0.83327	
	139	島内26-3	1.07363	0.45946	
	140	島内28-2	-0.78687	0.56163	
	141	島内29-3	1.04632	0.00343	
	142	島内32-1	0.09834	-1.07790	
	143	島内39-2	1.18503	-0.60249	
	144	島内41-2	-0.43505	-1.40990	
145	島内47-1	1.09766	0.18325		
146	島内64-2	-2.02264	-0.47414		
147	島内77-1	-0.77649	-1.55500		
148	島内77-2	-0.52617	-0.73080		
149	島内113-1	-0.62372	-1.62967		
150	島内126-1	1.01071	-1.42349		
151	島内126-2	1.19476	-1.04606		
152	島内131-1	1.23706	0.88792		
153	島内144-1	1.12097	-1.40686		
154	島内149-2	0.08257	-1.38482		
155	島内164-1	0.00187	-0.18171		
156	島内170-1	-1.94599	0.63221		
157	島内172-2	1.01934	0.51223		
158	筑前(古)	0.98661	-0.29227		
159	筑後(古)	0.53722	-0.17704		
160	肥前(古)	0.61761	-0.14080		
161	豊前(古)	0.51039	-0.19180		
162	豊後(古)	-0.23258	-0.28915		
163	南九州(古)	-0.61398	0.25454		
164	畿内(古)	0.39456	-0.86297		
165	津雲(縄)	-0.24291	0.49456		
166	三津(弥)	1.00770	-0.73055		
167	西北九州(弥)	0.14641	0.50934		
168	土井ヶ浜(弥)	0.64641	-0.60797		
169	礼安里	0.28040	-1.87044		

表5 主成分得点 (女性)

地域	No.	資料名	主成分得点						
			第1主成分	第2主成分					
1	1	クエゾノ1-2	0.54650	-1.21343	10	62	立切35-2	-1.78008	-1.99467
	2	卯内尺4-C	-0.79592	-0.36521	63	立切35-3	-1.13759	-1.82791	
	3	卯内尺4-D	-0.08422	-0.01246	64	立切35-4	0.26924	-1.12529	
	4	唐人塚	0.38857	0.06814	65	立切38-1	-1.97301	-0.20943	
2	5	南ノ前6	0.08268	-0.40130	66	立切38-4	-1.50859	-0.08846	
	6	長畑2	-0.57246	1.43802	67	立切40-1	-2.27704	-1.96375	
	7	反崎	1.48949	1.92083	68	立切40-2	-0.74424	-0.50146	
3	8	小口迫池上2号	-0.68028	0.52880	69	立切60-3	-2.01180	0.88776	
	9	前田山D-134	1.15705	1.34745	70	立切63-1	1.30432	-1.90506	
	10	前田山S-4-2	0.91038	0.60919	71	立切63-5	0.03022	1.21199	
	11	前田山S-5	1.61310	-0.73767	72	立切64-4	0.43733	0.12558	
	12	竹並A-62-4-1	-0.38150	0.85419	73	塚原43-1-2	0.36253	0.34008	
	13	竹並G-26-2	0.29224	-0.31107	74	原村上46-1	0.10524	-0.42769	
	14	竹並G-42-1-1	0.22485	1.69626	75	原村上5-1	1.00711	-0.05297	
	15	竹並H-45-6	2.14153	-0.53483	76	原村上6-1	1.69538	0.08252	
5	16	竹並H-48-1-1	0.75393	1.33442	77	原村上7-1	-1.71304	0.00209	
	17	乃木松5-1号	0.43402	-2.12564	78	原村上7-2	-2.05905	0.78506	
	18	古寺D-10	-0.35039	0.30935	79	築池1991-1	0.71426	1.05056	
	19	柿原I・C-51	1.26951	0.37568	80	築池2001-3	-1.13981	0.27021	
	20	外之隈II-1	-0.89979	0.42854	81	菓子野57-5-2	-0.81021	-0.28949	
6	21	今福	0.52142	0.31455	82	菓子野2011-2B-1	1.20396	-0.30273	
	22	平田原1-1	1.35219	0.68164	11	83	広畑02-1	-1.66219	1.30677
	23	平田原1-3-2	-0.39279	-0.97813	84	広畑02-2	0.61595	-1.31807	
	24	織島西分1-1	-0.41387	1.60887	85	広畑11-2	-0.28067	-0.45367	
	25	妻山	3.49662	-2.01720	86	広畑11-3	0.68642	-1.82632	
	26	双水柴山1-1	0.46489	-0.11508	87	島内17-1	-0.69312	-0.09301	
7	27	吹上1	-0.34256	0.15252	88	島内21-2	-0.02474	-1.77492	
	28	志津里B-1 2-2	0.05444	0.28296	89	島内29-1	0.38971	-1.04786	
	29	志津里B-2 1-1	-0.55989	0.32399	90	島内37-1	-0.73790	0.89979	
	30	志津里2-1	0.79561	-0.14456	91	島内39-1	0.88109	-0.01726	
	31	志津里2-2	1.16161	1.42710	92	島内40-1	-1.22354	0.33733	
	32	陣ヶ台3-B-2	-1.04953	1.29712	93	島内45-1	-1.60945	0.46436	
	33	陣ヶ台4-A-2	-0.06209	1.06793	94	島内52-3	0.37934	-0.57417	
	34	陣ヶ台4-A-3	0.38015	-0.61021	95	島内64-3	0.42645	-0.10746	
	35	陣ヶ台4-C-2	0.72353	1.96517	96	島内69-2	0.41118	-1.16326	
	36	山脇2	0.63715	-1.99502	97	島内77-3	1.81770	1.55445	
	37	長湯7-2	-0.48665	-0.60221	98	島内77-4	0.14363	2.53700	
	38	十六山1	-0.35262	-0.64913	99	島内85-1	-0.46527	0.46930	
8	39	向野田	-0.83910	1.66987	100	島内89-2	0.20138	0.62771	
	40	四十八塚1	-1.29274	-1.39909	101	島内106-2	-0.76738	0.33587	
	41	四十八塚3	-0.35924	-0.96436	102	島内106-4	-1.21123	0.78490	
	42	桐ノ木	0.26757	1.07396	103	島内115-1	-1.27057	0.55303	
9	43	西都原6-2	0.48493	-0.55826	104	島内127-2	-0.18715	1.17710	
	44	常心原5-1	1.68507	1.27494	105	島内131-2	0.94400	-0.82025	
	45	元地原2	-0.64454	-1.51923	106	島内152-2	-0.03231	0.20648	
	46	市の瀬9-2	0.47490	-0.03216	107	島内164-2	-0.07676	0.83198	
	47	飯盛	0.06996	-0.43827	108	島内164-3	1.66160	0.35938	
10	48	上の原1-1	-1.77435	0.21704	109	島内171-1	-0.35028	-0.09872	
	49	東二原2-2	0.10305	-0.48904	110	馬場1-B	-0.28493	-0.56126	
	50	東二原2-4	0.75298	-0.61237	CZ	筑前(古)	0.23646	0.80696	
	51	東二原8-1	0.29562	-1.56465	CG	筑後(古)	0.48892	0.14359	
	52	旭台3-1	-0.77950	-1.42113	HZ	肥前(古)	0.81852	-0.41958	
	53	旭台7-7	0.13658	-0.93176	BZ	豊前(古)	0.46011	0.34672	
	54	大萩A-C 3-1	-1.68516	0.00019	比較	BG 豊後(古)	-0.60551	0.00078	
	55	日守1-3	1.44998	-1.63353	MK	南九州(古)	-0.25980	-0.64034	
	56	立切4-1	0.54636	0.59112	集	KN 畿内(古)	0.35662	0.68025	
	57	立切6-3	0.27022	0.19603	団	TJ 津雲(縄)	0.05037	-0.65245	
	58	立切26-1	-0.99993	0.71894	MY	三津(弥)	1.19041	1.41306	
	59	立切26-2	-0.84804	-1.43215	SY	西北九州(弥)	-0.69364	-0.10565	
	60	立切30-6	-0.75247	0.43418	DY	土井ヶ浜(弥)	0.60243	0.71148	
61	立切31	-1.36032	-0.23930	RE	礼安里	1.03031	0.89849		

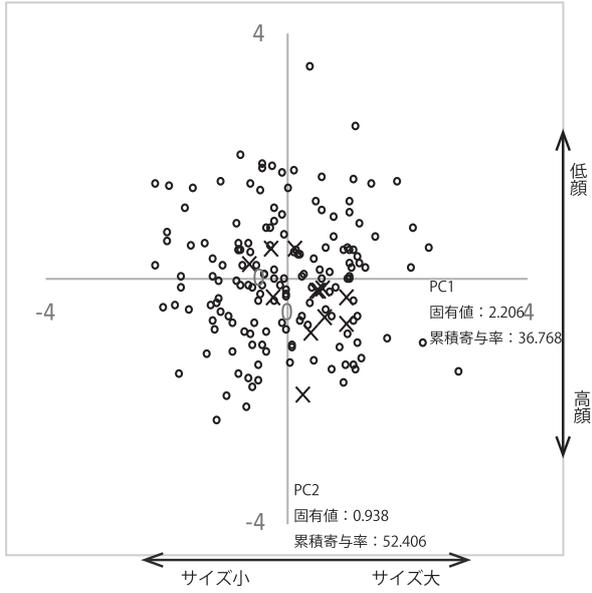


図2 主成分分析結果（男性）

○ = 対象資料各個体 × = 比較集団

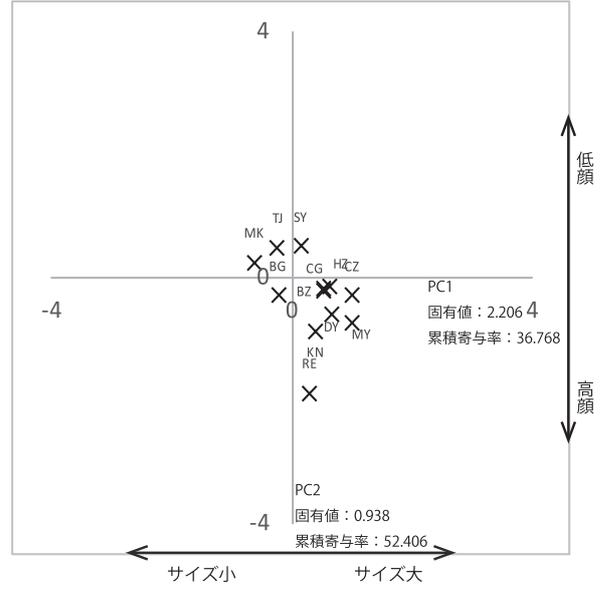


図3 主成分分析結果：比較集団（男性）

○ = 対象資料各個体 × = 比較集団

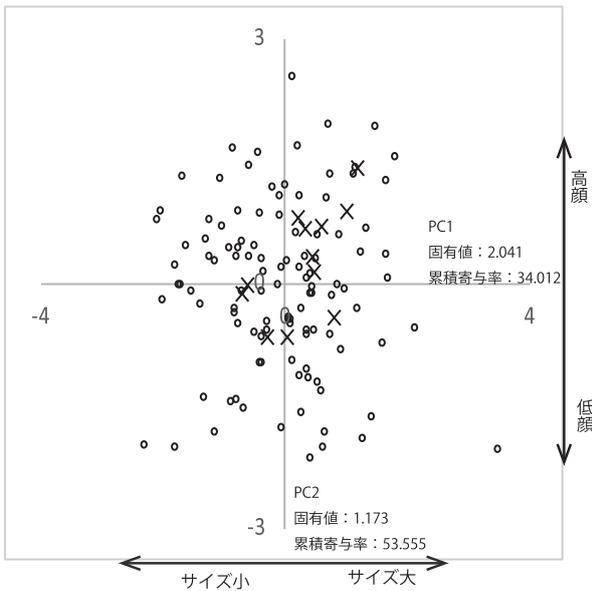


図4 主成分分析結果（女性）

○ = 対象資料各個体 × = 比較集団

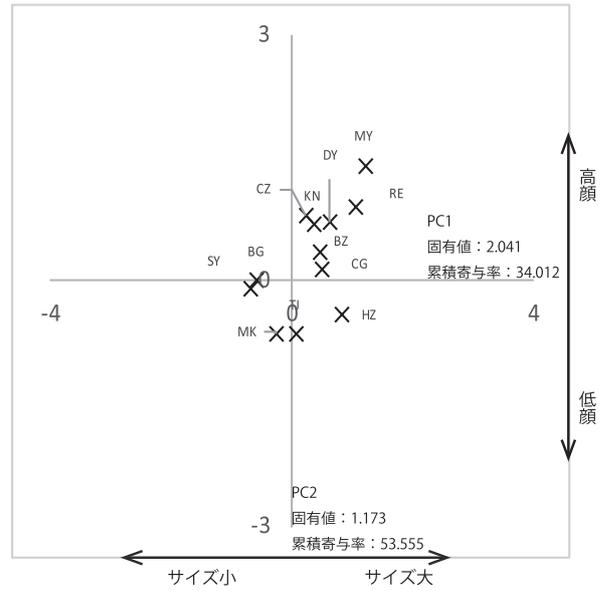


図5 主成分分析結果：比較集団（女性）

○ = 対象資料各個体 × = 比較集団

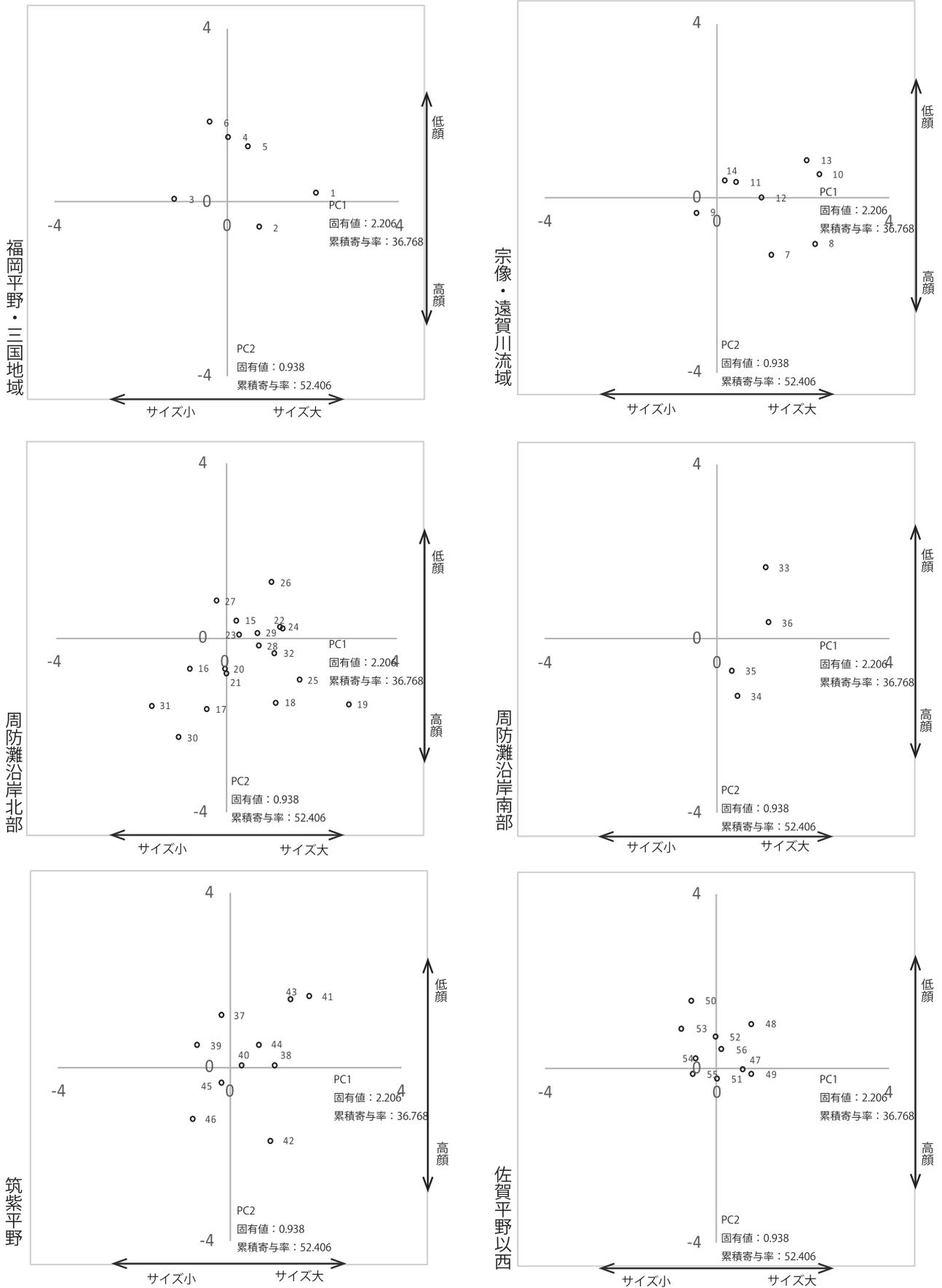


図6-1 地域別主成分分析結果(男性)

頭蓋の顔面部形態からみた古墳時代の地域社会

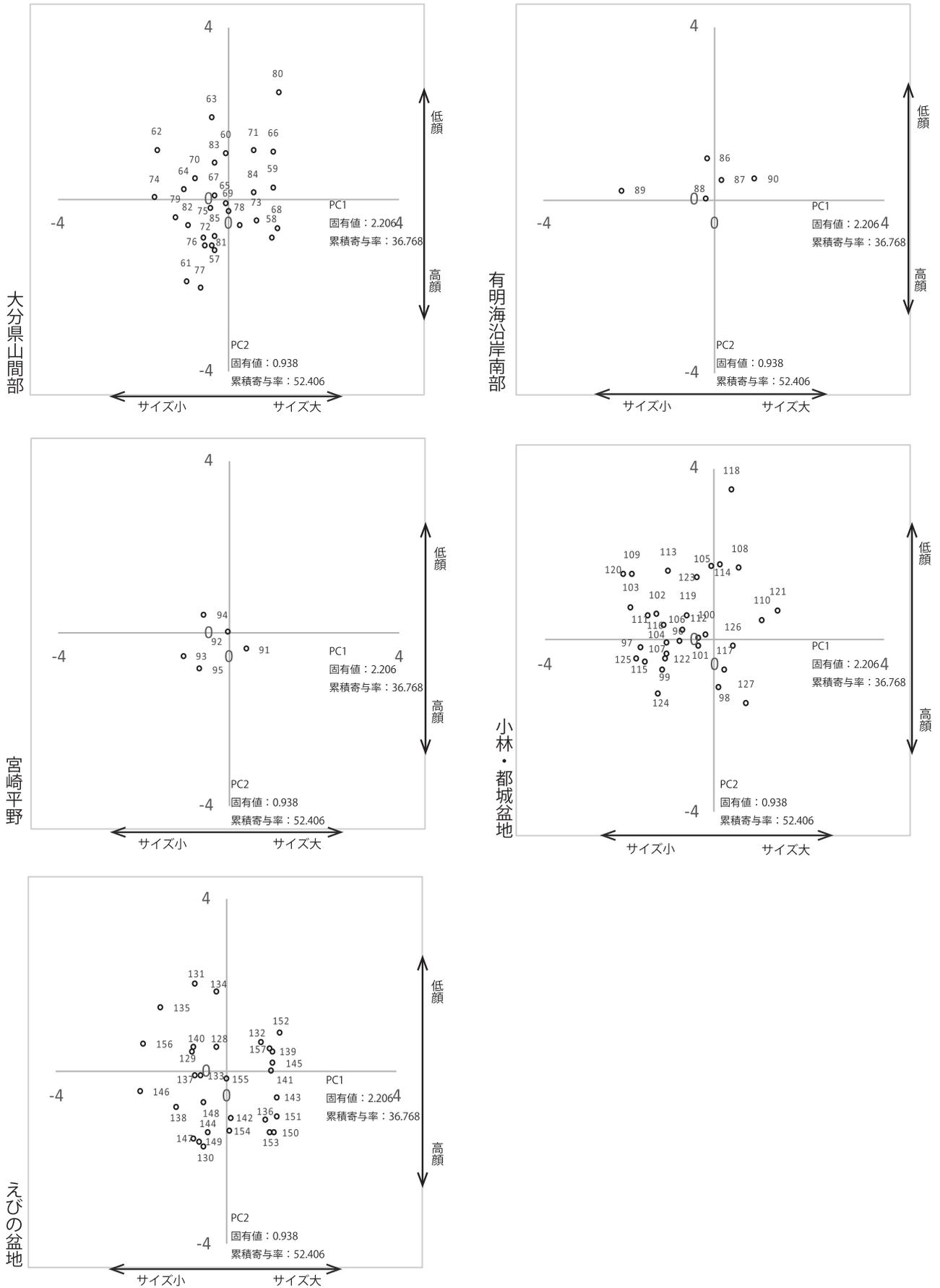


図6-2 地域別主成分分析結果(男性)

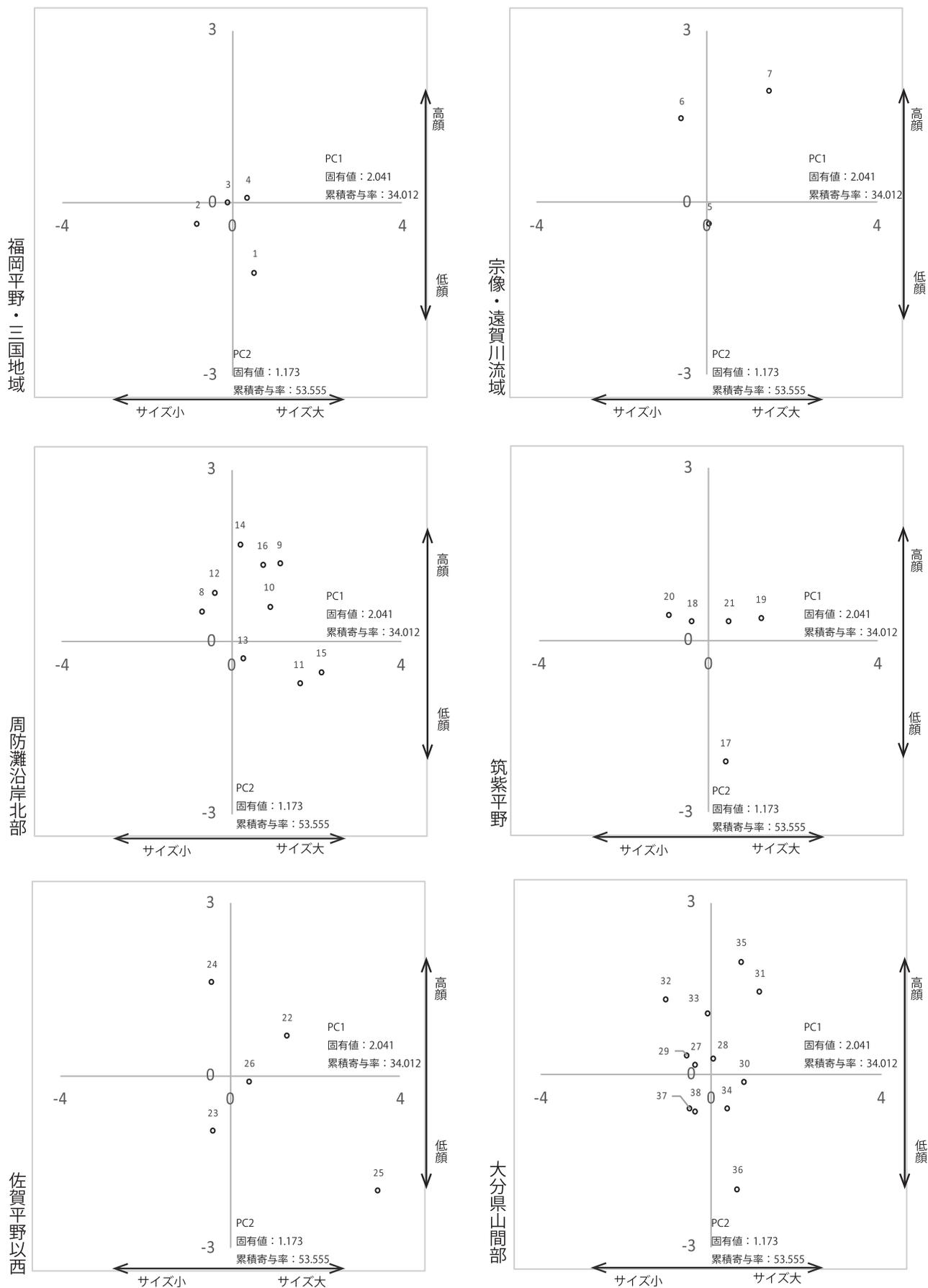


図 7-1 地域別主成分分析結果 (女性)

頭蓋の顔面部形態からみた古墳時代の地域社会

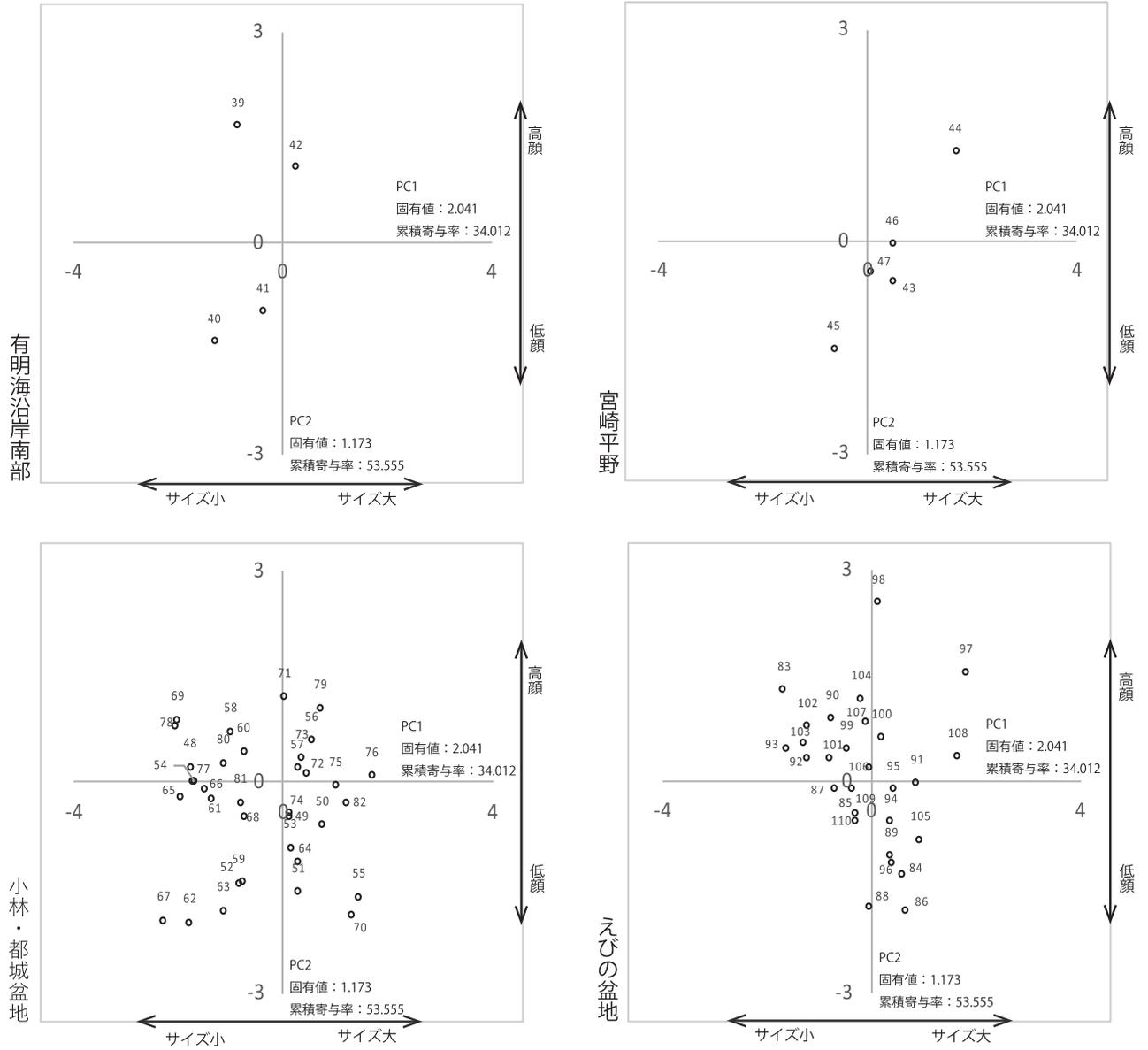


図 7-2 地域別主成分分析結果（女性）

て、男女の結果を照らし合わせつつ、各集団や個人の第2主成分得点に着目してその特徴を確認する。なお、以下の文章において、各個体の後ろに（ ）で散布図上の番号を示している。

(1) 福岡平野・三国地域(図6-1上段左・図7-1上段左)

女性は個体数が少ないため参考程度ではあるが、第2主成分において男性はプラス、女性はマイナスを示す傾向にある。すなわち、いずれも顔の高径に比して幅径が大きい傾向にあるといえる。卯内尺4号墳からは男女それぞれ2個体が分析可能であったが、男性(5, 6)は第2主成分でプラスを、女性(2, 3)はマイナスを示す。男性では和田B遺跡出土人骨(2)が唯一マイナスを示すが、それでも全個体中の中では際立った位置ではない。女性では特にクエゾノ遺跡の個体(1)が他の3個体より第2主成分得点が低い。

(2) 宗像・遠賀川流域(図6-1上段右・図7-1上段右)

女性については3個体のみ分析可能であったため、全体の傾向として捉えることはできない。男性は第2主成分得点が福岡平野・三国地域より低い傾向を示す。特に井手ノ上2号(7)・手光北3-1号(8)が他の個体と離れ、図の右下にプロットされることから、その傾向が強い。女性では反崎石棺(7)及び長畑2号墳(6)の個体が第2主成分において高い値を示している点が特徴的である。

(3) 周防灘沿岸北部(図6-1中段左・図7-1中段左)

男性では第2主成分においてマイナスを示す個体が多く、女性ではプラスに偏る傾向がある。特に男性では屋敷田山2号(30)が最も低い値を、女性では竹並G-42-1-1号(14)がそれぞれ最も高い値を示すが、同じく竹並遺跡出土人骨としては、男性では3体(26, 27, 28)とも強いマイナスを示すものではなく、女性ではA-62-4-1号(12)・H-48-1-1号(16)がプラスを示すものの、G-26-2号(13)・H-45-6号(15)はマイナスを示す。その他同一遺跡内で異なる傾向を示す資料としては、前田山遺跡出土人骨があげられる。男性では分析可能であった3個体(22, 23, 24)は全て第2主成分でプラスを示すが、

女性ではD-134号(9)・S-4-2号(10)がプラスを示し、S-5号(11)がわずかにマイナスを示す。

(4) 周防灘沿岸南部(図6-1中段右)

女性の分析可能な資料がなかったため、男性のみである。しかし男性も4個体しか分析が行えなかったため、参考程度に留める。第2主成分において上ノ原仮30号(34)が同地域内では最も強いマイナスを示し、同じく31号(35)がそれに次ぐが、30号ほど大きな値ではない。また、同遺跡出土の28号(33)はプラスを示す。

(5) 筑紫平野(図6-1下段左・図7-1中段右)

男性は原点を中心として第1・2主成分共にまんべんなく分布する。女性では第2主成分の値がほとんど同じグループから大きく離れて、乃木松5-1号(17)が最も低い値を示す。同じく乃木松5号墳出土の男性人骨(37)も第2主成分でプラスを示し、同様の傾向を示しているものの、突出するような値ではない。また男性では名木野遺跡出土人骨が第2主成分でそれぞれマイナス(9-1号, 42)、プラス(10-3, 4号; それぞれ43, 44)を示し、同一遺跡内で異なる傾向をみせる。

(6) 佐賀平野以西(図6-1下段右・図7-1下段左)

男性は第2主成分においてプラスに偏る傾向にあり、特に織島西分2-1号(50)が最も高い値を示す。一方同遺跡出土女性人骨(24)は当地域内で最も高い値を示し、男女で異なる傾向を示す。女性では妻山石棺出土人骨(25)が第2主成分で最も低い値を示す。

(7) 大分県山間部(図6-2上段左・図7-1下段右)

当地域は同一遺跡から人骨がまとまって出土した例が多く、遺跡内の個体差についても分析が可能であった。まず全体的な傾向として、男性は第1, 2主成分共にまんべんなく図上に分散している。女性は山脇2号(36)を除いて第2主成分はプラスに偏る。長湯遺跡は男性において第2主成分が低い傾向にあり、第3象限を中心に分布しているが唯一6-2号(80)が離れて第1象限にプロットされる。同遺跡出土女性人骨で分析可能であったのは1体だけであったが、この個体(37)も第2主成分においてマイナスを示す。志津里遺跡(石棺墓)は男性のB-12-1号(66)が第2主成分でプラスを示すが、全体として

は男女ともに第2主成分において原点付近に集中する。しかし志津里横穴出土の女性の2-2号(31)は第2主成分で高い値を示す。陣ヶ台遺跡では男性の4-A-1号(70)と低顔、4-B-1号(71)が第2主成分でプラスを示すが、女性では4-A-3(34)を除いてプラスである。また男性では後ノ迫2号(61)が長湯3-4号(77)の次に第2主成分得点が低いが、同遺跡出土の1号(60)・3号(62)はプラスである。山脇横穴からは男女1体ずつ人骨が出土しているが、男性(73)が第2主成分でマイナスを示すのに対し、女性(36)は上述の通りであり、異なる傾向を示す。

(8) 有明海沿岸南部周辺(図6-2上段右・図7-2上段左)

全体的に個体数が少ないため、この結果をもって地域性とは捉え難い。男性ではいずれも第2主成分でプラスを示し、女性は第2主成分においてプラスを示す個体(向野田・桐ノ木、それぞれ39, 42)とマイナスを示す個体(四十八塚1・3, それぞれ40, 41)に分かれる。四十八塚は男性(88, 89)においても第2主成分でプラスを示し、男女同様の結果を示す。

(9) 宮崎平野(図6-2中段左・図7-2上段右)

当地域も男女ともに分析可能であった個体は5体であり、これを以て当地域の特徴とは言い難い。男性では第3象限を中心に分布している。女性は第2主成分において常心原5-1号(44)を除いてマイナスを示す。特に元地原2号(45)が最も低い値を示す。

(10) 小林・都城盆地(図6-2中段右・図7-2下段左)

第1主成分において男性はマイナス側に偏るものの、男女ともに全体として図上にまんべんなく分布する。当地域も同一遺跡から複数の人骨が出土した例が多いため、遺跡ごとの特徴に注目したい。まず東二原地下式横穴墓群では、男性の8-2号(98)が第2主成分で最も低い値を示し、他の個体も低い傾向にある。一方女性は3個体(49, 50, 51)ともマイナスを示し、男女で異なっている。立切地下式横穴墓群では男性(107~117)は第2主成分でプラスを、女性(56~72)はマイナスを示す個体が多い。原村上地下式横穴墓群では男性(119, 120,

121)は第2主成分でプラスを示すが、女性もプラス(74~78)を示し、男女で異なる。

(11) えびの盆地(図6-2下段左・図7-2下段右)

男女ともに原点を中心としてまんべんなく分布する。島内地下式横穴墓群では第2主成分において男性(137~157)ではマイナス、女性(87~109)ではプラスを示す傾向にあり、特に77号墓出土人骨4体(男性; 147, 148, 女性; 97, 98)はいずれもその傾向が強い。広畑地下式横穴墓群でも男性では06号(130)と13-2号(133)が第2主成分でマイナス、女性では02-1号(83)がプラスを示すが、全体としては男性はプラス、女性はマイナスを示す傾向にある。

4. 考察

以上の分析の結果を踏まえ、古墳時代の九州における渡来的形質の拡散と、その背景に考えられる対外・対内交流について考察を行う。

(1) 福岡平野・三国地域

当地域は弥生時代には既に、北部九州の集団の中では特に強い高顔性をもった人々が存在していたことが示されており(中橋2005; 米元2022等)、古墳時代においてその形質が引き継がれているのか否かが問題となる。

クエゾノ1号墳出土女性人骨(1)は第2主体から出土し、玉類が副葬されていた。上述の通り、同遺跡中では比較的高い階層の人物と考えられる。同じく福岡市所在の老司古墳出土人骨(3・4)は2号石室及び4号石室の出土で、出土遺物の年代から、最も規模の大きい3号石室の次に造られた石室であり、3号石室被葬者の親族と考えられている(福岡市1989)。造墓契機となった人物ではないが、3号石室被葬者同様、中期の首長層と考えられる。同時期の資料としては卯内尺4号墳出土男女4体(男性: 5・6, 女性: 2・3)について分析を行った。以上3遺跡出土人骨は男性では第2主成分でプラス、女性はマイナスを示す傾向にある。特に男性では老司古墳4-2号(4)、卯内尺4-A・B号(5・6)が、女性ではクエゾノ1-2号(1)がいずれも低顔性²を示している。そのほかの個体については数値が突出しないため、低顔性/高顔性

を評価することは出来ないが、少なくとも高顔性を示す個体は認められない。

当地域は弥生時代以来朝鮮半島との活発な交流が行われた地域である。したがって実際には大陸に由来する人々も存在していた可能性は十分に考えられる。しかし少なくとも今回分析を行った中期首長層に関しては概して低顔性を示すという結果となった。この傾向は弥生時代の当地域において指摘される高顔性と一見矛盾するようにもみえるが、米元（2023）では弥生時代既に形質にヴァリエーションが認められることが指摘されており、低顔傾向にある人々も一定数存在していたことも考えられる。したがって今回の結果は、中期首長層にこのような弥生時代以来当地で暮らす人々に由来する特徴が示されたと解釈できよう。

（2）宗像・遠賀川流域

宗像地域所在の宮司井手ノ上古墳から出土した男性人骨（7）は高顔性を示すことが明らかとなった。同じく宗像地域の中期における中小首長墓である手光古墳群北支群3号の男性（8）も高顔性を示し、老司古墳や卯内尺4号墳など、福岡平野の中期首長墓の被葬者とは異なった様相を示す。

一方内陸部にあたる遠賀川流域の資料として、装飾付耳飾が出土した長畑遺跡が注目される。耳飾が副葬された石室からは人骨は出土しなかったが、墳丘を共有する2号石棺墓から出土した女性（6）は高顔性を示した。しかし、この結果をもって当時の遠賀川上流域にみられる新羅との交渉に参画した人物であるか、また櫛山古墳被葬者に対する嶋田（1991）と同様の評価を下すことができるか、といった判断を行うことは出来ない。今後考古資料も含めて更なる検討が必要である。

そのほか遠賀川流域では後期に南ノ前横穴墓群（男性：9、女性：5）、新延野田横穴（男性：10）、蜷ヶ丘横穴（男性：11）、稲築横穴（男性：13）、といった横穴墓から出土した人骨については、上記の宗像地域の中期首長墓ほど高顔性を示す個体は確認されなかった。資料の項で述べたような当地域における渡来人の継続的な流入を考慮し、そのような交流によって、時間を経るにつれ高顔性が強まることが想定するならば、今回の分析結果は逆のパターンを示したことになる。2集団間の違いとしては、時期差のほかに沿岸部と内陸部という地理的な違い、

あるいは古墳被葬者と横穴墓被葬者という階層的な違いがあげられるが、このような違いと形質との関係性までは今回の分析では示すことは出来ない。今後更なる検討が必要である。

なお、当地域は福岡平野・三国地域ほど強い低顔性を示す個体は確認されない。Doi and Tanaka（1987）では、筑前地域の高顔性が示されているが、上記の論文における筑前地域の資料は本稿における福岡平野・三国地域と、宗像・遠賀川流域の資料を含めた平均値を用いているため、高顔性という点においては当地域の特徴が反映されている可能性がある。

（3・4）周防灘沿岸北部・南部

北部ではまず弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺跡として前田山遺跡がある。人骨が出土したのは土壙墓及び石蓋土壙墓で、I-5号（男性：22）に素環頭が副葬されていたほかは遺物は出土していない（行橋市1987）。出土人骨の形態はD-134号女性（9）が高顔性を示す他は突出した個体は認められない。これらの人骨は歯冠計測値によって親族関係が検討されており、S-4-1（男性：23）・S-4-2（女性：10）、S-4-2・S-5（女性：11）、S-4-2・I-5の間に血縁関係が考えられている（田中良1995）。D-134号に関しては関係性が定かではないが、異なる形質を持つ人々が同一墓域内に埋葬されたことが確認できる。同時期の遺跡として、ビワノクマ古墳の墳丘下より検出されたビワノクマ石棺2号（男性：19）が、分析の結果高顔性を示した。そのほか高顔性を示した個体として郷屋C-3号人骨（男性：17）、岩屋古墳（男性：18）、屋敷田山2号（男性：30）古川平原5号（男性：31）があげられ、特に屋敷田山2号は強い高顔性を示す。

古墳時代中期の竹並遺跡ではH-41号男性（28）について分析が可能であり、結果わずかにマイナスを示している。後期も引き続き竹並遺跡で横穴墓が造営され、男性ではG-10-2-1号（26）に低顔性が示されたG-95-5（27）も数値は低いですが、少なくとも高顔性は認められない。一方女性ではG-42-1-1号・H-48-1-1号（14）に高顔性が認められた。竹並遺跡の男性における低顔性については既に田中良之氏の指摘がある。田中氏は竹並遺跡で6世紀後半から7世紀に爆発的に基数を増やすことから、他地域から京都平野に移動してきた人々の可能性を提示しているが（田中良2006）、今回その形質を明らかにできた

人骨については、副葬品と形質の間に集団の故地の違いを示すようなパターンは認められず、いずれも須恵器または土師器の副葬を基本としていた。

南部にあたる上ノ原横穴墓群の3個体は全て男性であり、高顔性を示す個体(仮30号:34)と低顔性を示す個体(仮28号:33)が確認された。土肥直美氏の報告では上ノ原横穴墓群出土人骨は北豊前よりもやや低顔、低眼窩、広鼻としており(土肥 1991)、今回の分析結果とはやや異なる。土肥氏は出土人骨の平均値を用いているが、今回は個体別に分析を行っているため、分析方法の違いに起因すると考える。

後期の横穴墓からは、この巢横穴墓(男性:15・16)、小口迫池上遺跡(男性:20・21、女性:8)の出土人骨が分析可能であった。いずれも第2主成分得点は突出しないが、この巢1号(15)を除き、平均よりは高顔に傾く。

以上の通り、当地域は古墳時代を通じて基本的には高顔の傾向を示す地域といえる。また、高顔に傾く人々と低顔性に傾く人々の間に時期や階層差などは特に認められず、少なくとも今回分析を行った有力農民層から中小首長層まではその階層によって形質が分かれなことを示している。

(5) 筑紫平野

池の上・古寺墳墓群では、池の上5号墓男性(38)および古寺D-10号墳出土女性人骨(18)が分析可能であった。いずれも小円墳に設けられた土壙墓に埋葬されており、同墳墓群中でも特に高い階層性を示すわけではない。また陶質土器の副葬の点でも共通する。資料の項にて、D-10号墳副葬されていたジョッキ形土器の問題を取り上げたが、この点について出土人骨の顔面部形態に注目すると、平均よりは高顔に傾くものの、その値はごくわずかであり、九州古墳時代人の範疇に入るものであった。

(6) 佐賀平野以西

谷口古墳出土男性人骨(52)は前方部に埋葬されており、後円部被葬者の次の世代の人物と考えられている(亀井 1982)。分析の結果、わずかに低顔に傾く。同じく唐津地域に所在する前方後円墳である双水柴山古墳から出土した男女(男性:54、女性:26)も同様の結果が示された。これらの古墳は唐津湾沿岸部に所在し、弥生時代

以来朝鮮半島と関わりのある地域であるが、古墳時代中期における首長層の形質は、少なくとも今回の分析の結果からは、福岡平野と類似した状況が確認される。

佐賀平野では、小隈1号男性人骨(48)、織島西分2-1号男性人骨(50)、妻山石棺女性人骨(25)が低顔性を示し、特に妻山石棺はその傾向が強い。一方織島西分1-1号女性(24)は高顔性を示す。

西北九州の弥生時代人骨の形態について研究を行った内藤芳篤氏は、佐賀平野の甕棺出土人骨の高顔性を指摘している(内藤 1971)が、個体別にその形質を比較した場合、高顔傾向にある個体・低顔傾向にある個体いずれも存在していたことが米元(2022)によって示されている。今回の分析結果でも佐賀平野出土資料は低顔傾向の個体と高顔傾向の個体いずれも確認されたが、織島西分古墳のように、同一墳墓から出土した男女間で異なる傾向を示す例も認められた。弥生時代では、女性の方がより低顔性を示すことが指摘されている(中橋 1989; 米元 2023)ことから、このような現象は従来の指摘とは異なり、形質と性差を考える上で重要である。今後更なる資料の増加を待ちつつ、再検討する必要がある。

(7) 大分県山間部

高顔性を示す個体として、男性では草場第2遺跡37-1号(57)、後ノ迫2号(61)、陣ヶ台4-C-1号(72)、長湯3-4号(77)、長湯7-1号(81)が、女性では志津里横穴2-2号(31)、陣ヶ台3-B-2号(32)、陣ヶ台4-A-2号(33)、陣ヶ台4-C-2号(35)があげられ、特に長湯3-4号は強い高顔性を示す。女性では玖珠地域出土の個体に高顔性が確認でき、特に陣ヶ台遺跡では4個体中3体が高顔性を示している。陣ヶ台遺跡は玖珠地域所在の前期の遺跡であり、分析を行った人骨は在地的な墳墓である方形周溝墓から出土している(玖珠町 1999)。古墳時代前期には既に、大分県山間部において高顔性を示す人々が存在していたことが示される。このような特徴が弥生時代まで遡るかについては、当地域の弥生時代人骨が乏しいため検証することは難しい。筑後川上流域における弥生～古墳時代の人々の交流の考古学的痕跡をさらに検討していく必要がある。

長湯横穴墓群では、3-4号が強い高顔性を示している。同じく3号墓から出土した他個体(男性75・76・78・79)の形態についても、少なくとも低顔性を示すものではない。

一方で6号墓出土の6-2号男性(80)は強い低顔性を示す。3号墓と6号墓の考古学的な違いは上述の通りであり、当遺跡を造営した集団の交流の様相については議論の余地がある。しかしいずれにしても福岡平野や宗像地域ではあまりみられない遺物・行為であることから、このような交流の違いが当遺跡内における形質の違いに示された可能性が考えられる。

(8) 有明海沿岸南部周辺

男性は全て第2主成分得点でわずかにプラスをとる一方、女性は向野田古墳出土人骨(39)、桐ノ木尾ばね古墳出土人骨(42)のように高顔性を示す個体が確認される。特に前者は時期的にやや遡るものの、同じく前方後円墳に埋葬された首長層としては老司古墳や谷口古墳被葬者とは異なったあり方を示している。また桐ノ木尾ばね古墳は八代海に浮かぶ維和島の前期古墳であることから、今回の結果は古墳時代前期には既に八代海沿岸や宇土半島の首長層に高顔性が認められることを示している。

(9) 宮崎平野

松下孝幸氏によって、高顔の人々が存在したことが指摘される地域である(松下1990)。分析の結果、男性においては高顔性/低顔性を示すような個体はなく、いずれも第2主成分得点は0付近の値をとっている。女性では元地原2号(45)が低顔性を示しているが、南九州の他地域にみられるような著しい値を示す個体は特に男性においてはみられない。被葬者像については副葬品等の情報が少ないため正確には計りかねるが、西都原16号6支線道路横穴出土女性人骨(43)を除いて地下式横穴墓から出土している点は共通しており、馬匹生産やその他渡来系遺物の出土は確認できないことから、当地域の高顔性については渡来人の直接の移入とするよりは、九州東岸ルートを通じた人々の交流の結果、あるいは弥生時代の交流に求めることができるかもしれない。

(10) 小林・都城盆地

当地域出土人骨の顔面部形態について、これまでの研究では同じ南九州でも平野部とえびの盆地と比べ低顔性が強いとされてきた(松下1990;高椋・米元2022)。個体別にみていくと、確かに男女ともに低顔性を示す個体が多く確認される。しかし一様に低顔性を示しているわ

けではなく、高顔性を示す個体も存在していたことも確認できる。また、高顔性を示す人々と低顔性を示す人々が同じ墓域に埋葬されていることも確認される。

東二原地下式横穴墓群では男性(96~101)はわずかに高顔を、女性(49~51)はわずかに低顔を示す傾向にある。男性に対して女性に低顔性がみられる点に関しては、既に弥生時代の北部九州でも認められ、形質の現れやすさには性差が関係する可能性が既に指摘されている(中橋1989;米元2023)。また、当地域にみられるような低顔・高顔様々な形質をもった人々が混在する様相は、弥生時代中期における北部九州の状況と類似する。弥生時代北部九州は縄文晩期から外来の人を小規模ながらに散発的に受け入れたことによって、中期に形質の多様性が増したと考えられており(田中良2014;米元2023)、それと同様の現象が当該地域の人々の形質に現れているともいえることから、古墳時代の当地域において在地の人を主体としつつも外来の人の移動・移住があった可能性が考えられる。移住の時期やその規模、その故地については今後考古資料と共に検討していく必要がある。

(11) えびの盆地

小林・都城盆地の項で述べた通り、九州東岸ルートを紹介した交流が行われていたことが想定され、このような交易が当地域における顔面部の高顔性とどのように関与するのかが問題となる。まず、広畑地下式横穴墓群(男性:128~134,女性:83~86)は先述の通り、閉塞方法の違いが集団の違いを示す可能性が示されている(中野和1991)。分析の結果を見ると、A類に属す地下式横穴墓出土人骨は16-2号男性(134)のみであり、低顔性を示している。B類からは男女計10体分析を行えたが、06号男性(130)が高顔性を示したほかは高顔性を示すような個体は2-1号女性(83)を除いて認められない。資料数が少ないため、A類/B類といった閉塞方法の違いと、その背後にある集団の違いが、顔面部形態に関係するかについては現時点で判断することは出来ないが、B類を営んだ集団の中で、その築造契機となった06号男性が高顔性を示すこと、以降の被葬者に同様の傾向が基本的に認められないことは、顔面部形態の異なる人々が同じ墓制のもとに埋葬されていたことを示す。

副葬品からヤマト政権との関係性が示唆される島内地下式横穴墓群(男性:137~157,女性:87~109)では、

今回行った分析においても先行研究の結果と同様、高顔性を示す個体が確認された。一方、他の南九州の地域のように低顔性を示す個体も特に女性において確認される(88, 89, 96)。島内地下式横穴墓群において高顔の個体が多数確認される背景について、可能性の一つとして他地域からの移住が考えられる。例えば、高度な渡来系の技術・知識を持った集団が、南九州内陸部の開発・経営に寄与することを期待したヤマト政権による計画的な移住が行われた場合である。実際、南九州では古墳時代における牧の存在が考えられている(鈴 2012; 河野 2022)が、島内地下式横穴墓群を造営した集団が、他地域から移住してきた渡来系技術者集団であると捉える根拠は現在のところ見つかっていない。また、そのような集団が実際高顔傾向を持った人々であるかは、今後検討する必要がある。

しかし、当遺跡造墓集団における高顔形質発現の背景にはやはり何らかの人の移動が関わると考える。その場合、九州東岸ルートを通じた活発な交流と、小林・都城盆地にも高顔性を示す個体が存在していたことを考慮すれば、宮崎平野から小林・都城盆地を經由してえびの盆地へと高顔の形質を持った人々が移動した可能性も考えられよう。しかし、このことはえびの盆地、特に島内地下式横穴墓群の特殊性を十分に説明しうるものではなく、いずれにしてもその流入の具体的な様相については考古資料と共に今後も検討していく必要がある。

5. おわりに

本稿では古墳時代の九州における渡来的形質の拡散とその背景について、形質人類学と考古学双方のアプローチにより考察を行った。分析においては頭蓋骨の顔面部の形態について、北部九州が南九州より高顔であるというこれまでの先行研究と概ね一致する結果が得られたが、各個体に注目すると、北部九州でも福岡平野の首長層に低顔性が確認されることや、南九州山間部でも高顔性が指摘されていたえびの盆地のほか、その東に位置する小林・都城盆地でも高顔の個体が多数存在することが確認された。また、これらの人骨について考古学的情報をもとに検討することで、その人物の被葬者像と当時の社会における位置づけを検討し、分析結果と照らし合わせる

ことで、古墳時代の九州における渡来系文化の広がりとの関係性や、各地域社会がどのようにそれを取り入れていたかについて若干ではあるが考察を行った。このように個々の個体の形質に注目し、考古学的情報と関連付けて解釈を行うことで、形質の分析だけでは明らかにできない人々の交流や、考古資料のみで語られてきた被葬者像に新たな解釈を与えることが可能になると考える。しかし、今回の分析では地域または男女間に個体数に偏りがあり、特に個体数が少ない地域に関しては、上記の結果を以て地域性とするのは難しい。また主成分分析による二次元展開図上で分布が偏る地域に関しても、その空間を埋める資料が今後発見される可能性もある。この点に関しては今後、資料の増加を待って再度検討していく必要があろう。また、方法に関しても課題が残されている。例えば今回の分析では資料数を確保するため顔面部の幅径に関しては頬骨弓幅ではなく上顔幅を用いていることから、顔の幅の点ではやや正確さに欠ける。また、本来渡来的形質という表現は弥生時代人骨にみられる、これまでの縄文時代人骨には見られない特徴を表すものである。その特徴としては既に挙げた金関(1976)、中橋・永井(1989)に詳しいが、このような形質が同じく渡来的要素としてそのまま古墳時代人骨に当てはめてよいかについては更なる検討を行っていく必要がある。例えば古墳時代人骨の特徴としては、前後する時代の人骨より顔面の、特に鼻根部が平坦であることが指摘されている(葉 1975; Yamaguchi 1980; Kawakubo 2007)。今回分析に用いた項目だけではなく、他の要素を検討材料とすることで、単なる「渡来的」形質だけではない古墳時代人の特徴を明らかにすることが可能となるかもしれない。また古墳時代における渡来的形質の拡散の背景に古墳時代の日本列島および朝鮮半島各地の動向を考えるのであれば、九州のみの分析では不十分である。今後は列島全域を含めたより広範囲における交流の諸相を確認する中で、人骨資料の形質と当時の交流の諸相について体系的に検討を行いたい。

謝辞

本稿は2023年1月に九州大学文学部に提出した卒業論文に修正を行ったものである。執筆にあたりまして、当時の指導教官であった九州大学人文科学研究院の宮本一夫先生、辻田淳一郎

先生をはじめ、九州大学比較社会文化研究院、九州大学総合研究博物館の諸先生方には終始多大なるご指導を賜りました。また、同じく舟橋京子先生、米元史織先生には、資料調査にもご協力いただき、研究に関する貴重な機会とご助言を賜りました。末筆ではございますが、ここに感謝申し上げます。

注

- 1 下山古墳および樫野古墳（図1：64, 65）は豊後水道沿岸部に位置し、本来は別の地域区分を設定すべきだが、資料数が著しく少なくなるため今回は大分県山間部に含めている。同様の理由で津袋大塚東側1号石棺（66）、町田堀遺跡（87）も図1に示す通りの地域に区分した。
- 2 本稿における高顔 / 低顔の表記の区分は次の通りである：主成分得点が全体の $1\sigma (\pm 1)$ を外れる個体 = 高顔性 / 低顔性、 $2\sigma (\pm 2)$ を外れる個体 = 強い高顔性 / 低顔性。

参考文献

- 赤崎敏夫 1979 「初期横穴墓の展開」『竹並遺跡』東出版 pp.506-519
- 東憲章 2005 「日向・大隅・薩摩地域における渡来人の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』九州前方後円墳研究会 pp.98-105
- 池田次郎 1993 「古墳人」『古墳時代の研究1 総論・研究史』雄山閣 pp.27-95
- 池畑耕一 2012 「各地の古墳 I 南九州」土生田純之 亀田修一『古墳時代研究の現状と課題上』同成社 pp.1-16
- 荃瀬明宏 1999 「古墳時代中期における墓制の渡来的様相——地下式横穴墓分布域を中心に——」『渡来文化の受容と展開——5世紀における政治的・社会的変化の具体葬——(2)』第46回埋蔵文化財研究会実行委員会 pp.127-165
- 宇佐市教育委員会 1987 『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書』II 宇佐市文化財調査報告書 第3集 宇佐市教育委員会
- 牛島陽一 1954 「佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究」『人類学研究』1 pp.273-303
- 大分県教育委員会 1982 『上ノ原遺跡群 I』大分県教育委員会
- 大分県教育委員会 1989 『佐知遺跡』大分県文化財調査報告書 81 大分県教育委員会
- 大分県教育委員会 1992 『植田市遺跡V』大分県教育委員会
- 大分県教育委員会 2004 『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』大分県文化財調査報告171 大分県教育委員会
- 小片丘彦 川路則友 峰和治 山本美代子 岡元満子 1986 「宮崎県菓子野地下式横穴出土の人骨」『菓子野地下式横穴 築池地下式横穴』都城市教育委員会 pp.47-66
- 小片丘彦 竹中正巳 峰和治 1996 「16号支線道路横穴墓群出土の人骨」『西都原地区遺跡』西都市教育委員会 p.128-136
- 小田富士雄 1970 「畿内型古墳の伝播」『古代の日本3 九州』角川選書 pp.67-89
- 小田富士雄 1987 「II. 考古学からみた渡来文化とその画期（シンポジウム 西南日本人）」『季刊人類学』18-4 社会思想社 pp.181-190
- 小野山節 1970 「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』16-3
- 片岡宏二 1996 「古墳文化の成立——古墳時代前期——」『小郡市史』第1巻 小郡市 pp.559-605
- 金関丈夫 永井昌文 佐野一 1960 「山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人骨 頭骨について」『人類学研究』7 pp.1-36
- 金関丈夫 1976 『日本民族の起源』法政大学出版局
- 亀井明德 1982 「谷口古墳」『末盧国』六興出版 pp.478-492
- 亀田修一 2005 「地域における渡来人の認定方法——豊前上毛郡地域を例として——」『九州における渡来人の受容と展開：第8回九州前方後円墳研究会資料集』第8回九州前方後円墳研究会実行委員会 pp.1-36
- 亀田修一 2013 「古代宗像の渡来人」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告III』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 pp.43-65
- 亀田修一 2018 「古墳時代の渡来人——西日本——」専修大学知性開発研究センター古代東ユーラシア研究センター年報 pp.43-62
- 亀田修一 2020 「列島各地の渡来系文化・渡来人」吉村武彦 吉川真司 川尻秋生編『渡来系移住民』岩波書店 pp.143-197
- 鹿本町教育委員会 1986 『津袋大塚東側1号石棺出土人骨研究報告書』鹿本町文化財調査報告書第2集 鹿本町教育委員会
- 河口貞徳 1987 「単人の埋葬」『鹿児島考古』21 鹿児島県考古学会 pp.1-17
- 香春町教育委員会 1998 『長畑遺跡 宮原遺跡小倉古墳 才立横穴墓』香春町文化財調査報告書第10集 香春町教育委員会
- 木下尚子 1996 「第2章 古墳時代の貝釧・貝の道——3～8世紀の南島交易」『南島貝文化の研究』法政大学出版局 pp.273-358
- 木下尚子 2004 「長湯横穴群7号墳出土のゴホウラ釧とヤコウガイ製品」『長湯横穴墓群 桑原遺跡』大分県教育委員会 pp.77-80
- 金鎮晶 白先溶 他 1985 「金海禮安里古墳群出土人骨（I）」『金海禮安里古墳群』I 釜山大学校博物館 pp.321-369
- 九州大学医学部解剖学第二講座編 1988 『日本民族・文化の生成 2 九州大学医学部解剖学 第二講座所蔵古人骨資料集成』六興出版
- 清野謙次 1938 「古墳時代日本人の人類学的研究」『人類学・先史学講座』2 雄山閣 pp.1-20
- 清野謙次 宮本博人 1926 「津雲貝塚人骨の人類学的研究」『人類学雑誌』41-3 pp.95-208
- 玖珠町教育委員会編 1999 『陣ヶ台遺跡』玖珠町文化財調査報告書第9集 玖珠町教育委員会
- 久住猛雄 2007 「「博多湾貿易」の成立と解体——古墳時代初頭前後の対外交易機構——」『考古学研究』53-4 考古学研究会 pp.20-36
- 熊谷公男 2001 『大王から天皇へ』講談社

- 熊本県宇土市教育委員会 1978『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集 熊本県宇土市教育委員会
- 河野保博 2022「古代九州北部における馬匹生産の展開と鞠智城」歴史公園鞠智城・温故創生館『鞠智城跡「特別研究」論文集10：鞠智城と古代社会』熊本県教育委員会 pp.47-78
- 合田幸美 1995「朝鮮半島の竈」『研究紀要』2（財）大阪府文化財センター pp.137-166
- 小林市教育委員会 1990『東二原地下式横穴墓群』小林市文化財調査報告書第2集 小林市教育委員会
- 佐伯和信 松下孝幸 折原義行 小山田常一 1991「宮崎県えびの市広畑遺跡出土の古墳時代人骨」『広畑遺跡』宮崎県えびの市教育委員会
- 佐賀県教育庁文化課 1986『久保泉丸山遺跡』佐賀県文化財調査報告書84 佐賀県教育庁文化課
- 佐賀県教育庁文化課編 1991『老松山遺跡』佐賀県教育庁文化課
- 重藤輝行 杉元岳史 神保公久 2005「筑前・筑後の渡来系の遺構・遺物」『九州における渡来人の受容と展開：第8回九州前方後円墳研究会資料集』第8回九州前方後円墳研究会実行委員会 pp.37-53
- 重藤輝行 2011「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺産群』研究報告Ⅰ「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議 pp.71-101
- 嶋田光一 1991「福岡県壱山古墳の再検討」『古文化談義 児島隆人先生喜寿記念論集』児島隆人先生喜寿記念事業会 pp.507-557
- 鈴千夏 2012「南九州と近畿における馬の生産と埋葬」『南九州とヤマト王権——日向・大隅の古墳——』大阪府立近つ飛鳥博物館 pp.125-127
- 高田寛太 2014『古墳時代の日朝関係——新羅・百済・大伽耶と倭の交渉史——』吉川弘文館
- 高椋浩史 2021「九州における古墳時代人骨の四肢骨形態の研究」『持続する志 上』岩永省三先生退職記念論文集 中国書店 pp.407-426
- 高椋浩史 2022「九州における古墳時代人骨の頭蓋形態の研究」『九州大学総合研究博物館研究報告』19 九州大学総合研究博物館 pp.52-67
- 高椋浩史 米元史織 2022「古墳時代人骨の地域性」『日本考古学協会 2022 年度福岡大会研究発表資料集』日本考古学協会 2022 年度福岡大会実行委員会 pp.125-133
- 竹中正巳 2010「古人骨からみた南九州の古墳時代人」瀧川渉編『骨考古学と蝦夷・隼人』同成社 pp.70-88
- 竹中正巳 2017a「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨——131～162号から出土した人骨——」『島内地下式横穴墓群Ⅴ 灰塚地下式横穴墓群』pp.281-292
- 竹中正巳 2017b「宮崎県えびの市灰塚地下式横穴墓群出土の人骨」『島内地下式横穴墓群Ⅴ 灰塚地下式横穴墓群』えびの市教育委員会 pp.319-328
- 竹中正巳 2020「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨——163～173号墓から出土した人骨——」『島内地下式横穴墓群Ⅵ 灰塚地下式横穴墓群Ⅱ』えびの市教育委員会 pp.165-186
- 竹中正巳 柄本優子 下野真理子 2010「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨」『島内地下式横穴墓群Ⅱ』えびの市教育委員会 pp.121-156
- 竹中正巳 下野真理子 2014「宮崎県都城市菓子野地下式横穴墓群 2011-2A・2B号墓から出土した人骨」『都城市内遺跡 7』都城市教育委員会 pp.31-40
- 竹中正巳 下野真理子 2016「鹿児島県鹿屋市町田堀遺跡地下式横穴墓群出土人骨」『町田堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター pp.1-8
- 竹中正巳 高橋由香 下野真理子 2009「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨——113号墓～115号墓, 117号墓～124号墓から出土した人骨——」『島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡元遺跡』えびの市教育委員会 p.199-288
- 竹中正巳 峰和治 大西智和 小片丘彦 染田英利 2001「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土人骨」『島内地下式横穴墓群』宮崎県えびの市教育委員会 pp.1-75
- 田中裕介 2005「豊前・豊後地域（大分県）における渡来人の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』九州前方後円墳研究会 pp.106-111
- 田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究』柏書房
- 田中良之 2006「国家形成下の倭人たち——アイデンティティの変容——」『東アジア古代国家論』pp.15-30
- 田中良之 2014「第一章 いわゆる渡来説の成立過程と渡来の実像」古代学協会『列島 初期稲作の担い手は誰か』すいれん舎 pp.3-48
- 辻田淳一郎 2012「古墳文化の多元性と一元性」一瀬和夫 福永伸哉 北條芳隆編『古墳時代の考古学 7 内外の交流と時代の潮流』同成社 pp.44-56
- 辻田淳一郎 2015『山の神古墳の研究：「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に』九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室
- 津屋崎町教育委員会 1991『宮司井手ノ上古墳』津屋崎町文化財調査報告第7集 津屋崎町教育委員会
- 津屋崎町教育委員会 1996『在自遺跡群3』津屋崎町文化財調査報告書11 津屋崎町教育委員会
- 土肥直美 1991「4. 人骨」『上ノ原横穴墓群Ⅱ』大分県教育委員会 pp.467-483
- 栃原博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31 pp.1-50
- 内藤芳篤 1971「西北九州出土の弥生人骨」『人類学雑誌』79-3 pp.236-248
- 内藤芳篤 1985「南九州およびその離島」（シンポジウム 国家成立前後の日本人——古墳時代人骨を中心に——）『季刊人類学』16-3 京都大学人類学研究会 pp.34-47
- 永井昌文 1981「Ⅲ. 古墳時代人骨（シンポジウム 骨から見た日本人の起源）」『季刊人類学』12-1 pp.18-26
- 永井昌文 1985「北部九州・山口地方」（シンポジウム 国家成立前後の日本人——古墳時代人骨を中心に——）『季刊人類学』16-3 pp.47-57
- 中野和浩 1991「Ⅴ. まとめ」『広畑遺跡』宮崎県えびの市教育委員会 pp.73-80

- 中野幡能 2001 「第1節 律令時代以前——記紀と風土記の世界」『香春町史』上 pp.166-195
- 中橋孝博 1989 「性差」『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』雄山閣 pp.52-64
- 中橋孝博 2005 『日本人の起源』講談社
- 中橋孝博 永井昌文 1981 「1. 形質（弥生人）」『弥生時代の研究』1 雄山閣 pp.23-51
- 西嶋剛広 2014 「甲冑から見た九州と倭王権との地域間交流」『第17回九州前方後円墳研究会 大分大会 古墳時代の地域間交流2』第17回九州前方後円墳研究会 大分大会実行委員会 pp.115-140
- 橋口達也 1982 「Ⅲ. 陶質土器についての若干の考察」『古寺墳墓群』甘木市教育委員会 pp.47-56
- 橋口達也 1993 「横穴発生過程についての覚書」『古文化談叢』30 (中) 九州古文化研究会 pp.479-492
- 橋本達也 2002 「九州における古墳時代甲冑——総論にかえて——」『考古学ジャーナル』496 ニューサイエンス社 pp.4-7
- 橋本達也 2010 「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系 pp.91-107
- 橋本達也 2012 「九州南部と古墳文化」『古墳時代の考古学7 内外の交流と時代の潮流』同成社 pp.133-145
- 馬場悠男 1991 「人骨計測法」人類学講座編纂委員会『人類学講座 別巻1 I 生体計測法』雄山閣 pp.157-352
- 福岡県教育委員会 2000 『築城五反田遺跡・築城小迫遺跡』福岡県文化財調査報告書153 福岡県教育委員会
- 福岡市教育委員会 1989 『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 209 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 1994 『西新町遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書375 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 1995 『クエゾノ遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 420 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 2000 『梅林遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 648 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 2003 『梅林遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 781 福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会 2012 『卯内尺古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 1142 福岡市教育委員会
- 北条暉幸 1978 「向野田古墳の人骨について」『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集 p157
- 北條芳隆 2012 「総論 古墳時代における環境と地域間の相互作用」一瀬和夫 福永伸哉 北條芳隆編『古墳時代の考古学7 内外の交流と時代の潮流』同成社 pp.1-12
- 松下孝幸 1981 「宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨」『宮崎県文化財調査報告書』24 宮崎県教育委員会 pp.114-140
- 松下孝幸 1984 「宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨」『宮崎県文化財調査報告書』27 宮崎県教育委員会 pp.53-111
- 松下孝幸 1988 「宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨」『原村上地下式横穴墓群 高崎町出土の古墳時代人骨』宮崎県教育庁文化課 pp.54-174
- 松下孝幸 1990 「南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究」『長崎医学会雑誌』65 巻4号 pp.781-804
- 松下孝幸 1997 「福岡県犀川長古川平原古墳群出土の古墳時代・近世人骨」『古川平原古墳群』犀川長教育委員会 pp.82-98
- 松下孝幸 2000 「福岡県岡垣町南ノ前墳墓群出土の古墳時代人骨」『南ノ前古墳群』岡垣町教育委員会 pp.1-24
- 松下孝幸 佐伯和信 1993 「宮崎県小林市東二原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨」『東二原地下式横穴墓群 下の野平地下式横穴墓群』付論 宮崎県小林市教育委員会 pp.1-44
- 松下孝幸 中谷昭二 1986 「宮崎県国富町の瀬地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨」『井水地下式横穴墓群 市の瀬地下式上ノ原遺跡』宮崎県教育委員会 pp.145-185
- 松下孝幸 野田耕一 1983 「宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨」宮崎県文化財調査報告書第26集 宮崎県教育委員会 pp.78-107
- 松下孝幸 分部哲秋 1987 「佐賀県唐津市双水柴山遺跡等出土の古墳時代人骨」『双水柴山遺跡』唐津市教育委員会 pp.81-109
- 松下孝幸 分部哲秋 石田肇 1983 「宮崎県都城市菓子野地区横穴出土の古墳時代人骨」『都城・中之城跡・菓子野地下式』都城市教育委員会 pp.105-145
- 松下孝幸 分部哲秋 佐伯和信 折原義行 小山田常一 1991 「宮崎県西諸郡郡高原町立切地下式横穴墓出土の古墳時代人骨」『立切地下式横穴墓群』付論 宮崎県西諸郡郡高原町教育委員会 pp.1-33
- 松下孝幸 分部哲秋 佐伯和信 折原義行 小山田常一 1991 「佐賀県三日月町織島西分古墳群出土の古墳時代人骨」『老松山遺跡』大分県教育庁文化課 pp.333-351
- 松下孝幸 分部哲秋 佐伯和信 1992 「熊本県宇土市西潤野2号墳出土の古墳時代人骨」『立岡古墳群』宇土市教育委員会 pp.71-84
- 松下孝幸 分部哲秋 中谷昭二 1985 「長崎県小佐々町古田A遺跡出土の古墳時代人骨」『古田遺跡』小佐々町教育委員会 p51-64
- 宮崎県えびの市教育委員会 2001 『島内地下式横穴墓群I』えびの市埋蔵文化財調査報告書29 宮崎県えびの市教育委員会
- 宮崎県えびの市教育委員会 2009 『島内地下式横穴墓群III 岡元遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書50 宮崎県えびの市教育委員会
- 宮崎県えびの市教育委員会 2010 『島内地下式横穴墓群II』えびの市埋蔵文化財調査報告書49 宮崎県えびの市教育委員会
- 宮崎県えびの市教育委員会 2012 『島内地下式横穴墓群IV』えびの市埋蔵文化財調査報告書53 宮崎県えびの市教育委員会
- 宮崎県えびの市教育委員会 2017 『島内地下式横穴墓群V』えびの市埋蔵文化財調査報告書54 宮崎県えびの市教育委員会
- 宮崎県えびの市教育委員会 2020 『島内地下式横穴墓群VI 灰塚地下式横穴墓群II』えびの市埋蔵文化財調査報告書58 宮崎県えびの市教育委員会
- 宮崎県教育委員会 1994 『九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書2：野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡』宮崎県教育委員会

- 宮崎県西諸県郡高原町教育委員 1991『立切地下式横穴墓群』高原町文化財調1 宮崎県西諸県郡高原町教育委員
- 宮崎県立西都原考古博物館 HP 収蔵品検索 <https://saito-muse.pref.miyazaki.jp/web/database.html>
- 宮田浩之 1996a「古墳の築造と大陸文化の影響」『小郡市史』第1巻 小郡市 pp.609-656
- 宮田浩之 1996b「朝鮮半島に渡った筑後の馬」『小郡市史』第1巻 小郡市 pp.725-741
- 宮田浩之 2002「筑紫平野北部の渡来人」『究班』II 埋蔵文化財研究会 pp.399-406
- 桃崎祐輔 1993「古墳に伴う牛馬供儀の検討——日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して——」『古文化談叢』31 pp.1-140
- 森沢佐歳 1976「日本古墳人頭蓋形質の地方差について」『新潟医学会雑誌』90 pp.32-47
- 山口敏 1985「V. 東日本——とくに関東・東北南部地域——(シンポジウム 国家成立前後の日本人——古墳時代人骨を中心に——)」『季刊人類学』16-3 pp.70-82
- 山口敏 1988「東日本の古墳・横穴墓出土人骨の顔面平坦度計測」『日本民族・文化の生成1 永井昌文教授退官記念論文集』六興出版 pp.35-46
- 山中英彦 2005「第1節 稲童古墳群の形成」『稲童古墳群』行橋市教育委員会 pp.238-243
- 行橋市教育委員会 1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第6集 行橋市教育委員会
- 葉歩銃 1975「日本人顔面頭蓋のいわゆる平坦度について——その性差と時代的推移——」『新潟医学会雑誌』89-8 pp.373-383
- 横田義章 児玉真一 伊崎俊秋 1981「V 総括」『手光古墳群I』福岡町教育委員会 pp.88-104
- 米元史織 2022「北部九州の弥生時代人：頭蓋形質の地域差について」『九州大学総合研究博物館研究報告』19 九州大学総合研究博物館 pp.33-49
- 米元史織 2023「北部九州の弥生時代人達：いわゆる渡来系形質について」『九州大学総合研究博物館研究報告』20 九州大学総合研究博物館 pp.49-73
- 分部哲秋 野田耕一 佐伯和信 長嶋聖司 1993「長崎県高来町中江遺跡出土の人骨」『中江遺跡・上田井原遺跡』高来町教育委員会 pp.57-68
- 和田晴吾 2015『古墳時代の生産と流通』吉川弘文館
- Brooks S. and Suchey J.M. 1990. Skeletal age determination based on the os pubis: A comparison of the Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. *Human Evolution* 5: 227-238
- Buikstra J. H. and Ubelaker D. H. 1994. Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas: Arkansas Archaeological Survey Report Number 44.
- Doi N. and Tanaka Y. 1987. A Geographical Cline in Metrical Characteristics of Kofun Skulls from Western Japan. *人類学雑誌* 95-3 pp.325-343
- Kawakubo Yoshinori 2007 Geographical and temporal variation in facial flatness in the crania of eastern Japan. *Anthropological science* 115 pp.191-200
- Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. 1985. Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68: 15-28
- Martin, R. und K. Saller, 1957 *Lehrbuch der anthropologie dritte auflage Band I.* Gustav Fischer verlag Stuttgart pp.429-518
- Sakaue K. 2006. Application of the Suchey-Brooks system of pubic age estimation to recent Japanese skeletal material. *Anthropological Science*. 114: 59-64
- Yamaguchi, B. 1980 “A study on the facial flatness of the Jomon Crania”, *Bulletin of the National Science Museum, Series D*, 6 pp.21-28

Received Dec. 15, 2023; accepted Jan. 25, 2024

Kofun Period Regional Society as seen through Cranio-facial Morphology: A Case Study of Kyushu Island, Japan

Akari TABUCHI

Graduated school of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University
744 Moto-ka, Nishi-ku, Fukuoka 819-0395, Japan

This paper investigates the facial morphology of Kofun period crania excavated in Kyushu. The geographical distribution of continental characteristics during the Kofun period is clarified utilizing physical anthropometric analysis. Archaeological studies have revealed that the Kofun period was marked by ongoing interactions with the Korean Peninsula, and it is possible that the movement of people that accompanied these interactions contributed to the regional characteristics seen in human skeletal remains. However, there are few studies integrating the results of physical anthropology and archaeology. If wide-area interactions took place during the Kofun period, it is necessary to collect, organize, and analyze materials excavated from the entirety of such areas. This paper focuses on Kyushu, which has been a contact point of interaction with the Asian mainland since the Yayoi period. The purpose of this study is to clarify the interaction between the Japanese archipelago and the Korean peninsula at that time by integrating the analysis of facial morphology of Kofun period skeletal remains with archaeological information such as grave goods and burial methods associated with each individual. Instead of utilizing regional averages as anthropologists typically do, the raw data of each individual was used. In this way, the relationship between individual life histories reconstructed from archaeological evidence and facial morphology can be examined. Results generally confirm previous studies. However, by analyzing each individual, individuals and groups with characteristics that differ from the previous studies were identified, especially in southern Kyushu. Therefore, it is concluded that the interaction of people inside Kyushu may have contributed to the diffusion of skeletal morphological traits.

Key words: Kyushu, crania of Kofun period, facial morphology, principal component analysis, interaction